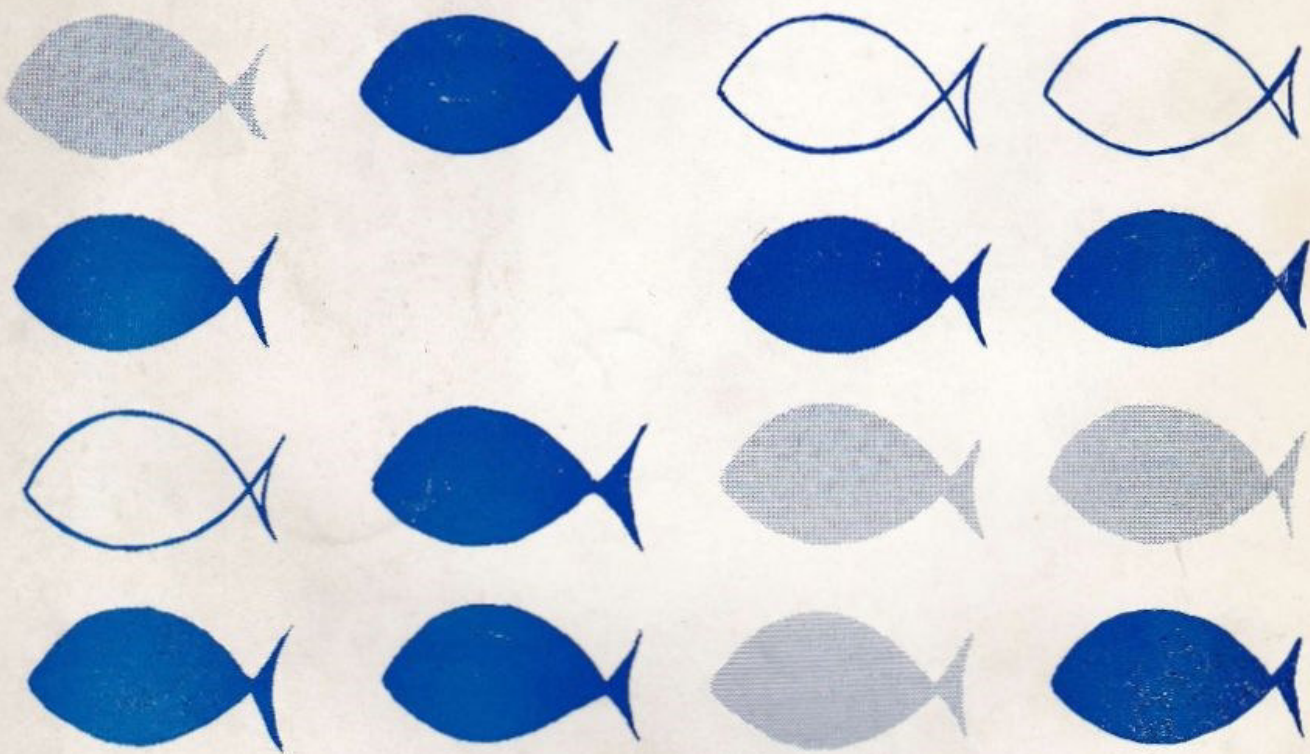


# 4 だん

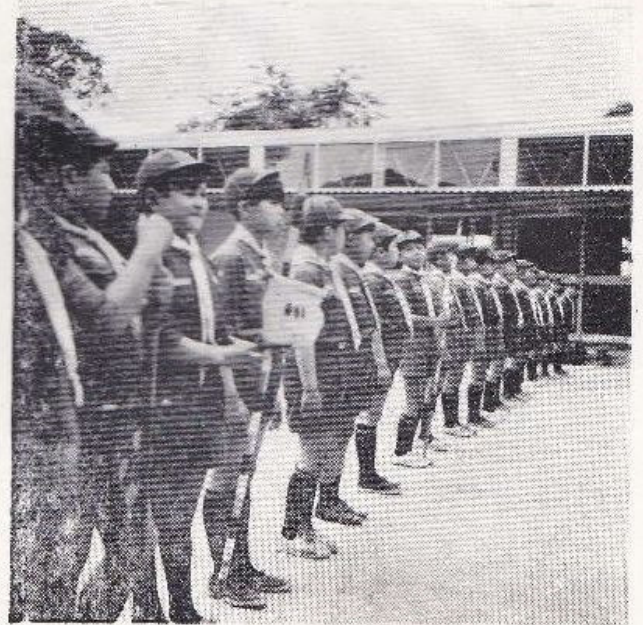
カブスカウト  
15周年記念誌







1969



1969 整列練習





←

1965  
第1地区ラリー  
滝山城趾

→

1964  
志賀高原キャンプ



←

1968  
羽村キャンプ



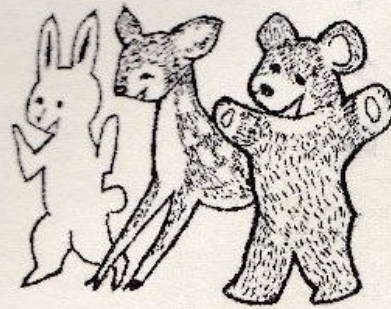




目次

たいどで示そうヨ	飯清	8
カブスカウトの皆さんへ	内藤正	9
吾輩はハットである	藤井諭	10
他団から	小暮幹雄	10
二八六団	美藤章	12
一六四団	真島英郎	13
一五三団	飯田貞雄	15
半分のダイヤのジャック	飯田貞雄	15
バトンタッチ		14
二代隊長	杉原正	16
三代隊長	万石俊夫	17
四代隊長	大島啓義	18
ヤアカブ君	今田富士夫	19
	日下部英一	20
	柳健一	21
OBのページ		
おもいで	三島完治	22
ぼくの夢	坂井安	22

親子どんぶり	一組	44
	二組	49
	三組	56
	四組	63
デンチーフのページ		
五十年後		
	龍	70
	杉田英彰	70
	高橋徹次	71
	手塚真	71





キャンプの思い出	小松 正太郎	23
カブスカウトの人たちへ	針替 茂人	24
とりとめのない話	川田 裕人	25
カブからローバーまで	百塚 健一	26
カブ隊の発展のために	大内 丘	27
インディアン部落	落合 光治	28
幸 福	高橋 恆久	29
キャンプあれ・これ		
山中舎営の思い出	大和 節	30
とんびの歌	八木 千恵子	32
月光仮面	西木 久美子	33
思 い 出	高島 恆子	34
おばけ屋敷	里見 明子	35
むかしむかし	高野 梓	36
キャンプを通して	萩原 昌子	37
初めてのキャンプ	鈴木 徳子	38
八ヶ岳美しの森キャンプ	渡辺 和子	39
カブキャンプ	伊藤 洋子	40
キャンプの反省	内藤 正樹	41
羽村キャンプ	田中 万里子	42

ブラウニーのページ

五十年後

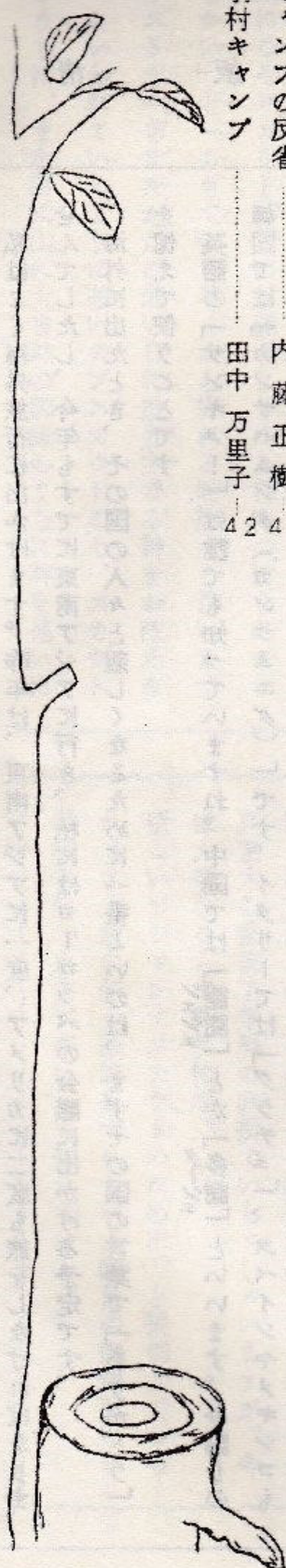
尾関 由岐子	72
秋永 晴子	72
松崎 直子	73

むだ話

里見、片岡	74
丸山、長谷川	74
原、松田	75

カブ隊年表  
編集後記

カブ隊年表	76
編集後記	78





# ヨウソウでいろいろ

飯 清 会長 育成会

私はよく海外旅行に出かけます。昨年は、東南アジアに一度、アメリカに二度も旅をしなければなりません。今年もすでに東南アジアに行き、秋にはヨーロッパの会議に出かける予定です。海外に出たとき、その国の人々と親しくなるために一番よいのは、まずその国の言葉で「ありがとう」を憶えて使うことです。

英語の「サンキュー」は誰でも知っていますね。中国では「<sup>シエシエ</sup>謝謝」とか「<sup>ダシエ</sup>多謝」といいます。お隣りの韓国では「カンサハムンダ(カンサムニダ)」です。イタリアでは「グラチエ」、スペインやメキシコも似ていて「グラシアス」です。ドイツでは「ダンケ」、エジプトは「シユクラン」、イスラエルは「トダ」、フランスは「メルシー」です。そして外国ではありませんが、アメリカの占領下にある沖縄では「ニヘ・デービル」といいます。

ところで「ありがとう」をいうのは、何も言葉だけではありません。言葉のほかに、顔や態度で感謝をあらわすことができます。

「シアワセなら手を叩こう」という歌があります。あの作詞者木村リヒト君は、私たちの団委員長だった田中正男先生のお嬢さんの恵子さん(彼女はGSのリーダーで、妹の万里ちゃんは、デン・マザーでしたネ)の夫君です。歌の言葉はこう続きます「シアワセなら態度で示そうよ……」。

私たちが、本当に有難いと思ひ、嬉しくて感謝しているなら、シカメ面やフクレ面でいがみ合っているのではなく、態度に出てくるはずですよ。

私たちが、心の中に神様への感謝があふれ、人々の親切を嬉しいと思っているなら、顔はニコニコし、行動が愛に貫かれたものとして、「ありがとうを態度で示そうよ」と歌えるはずですよ。

飯 清 — 霊南坂の主任牧師でいらっしや、文の中にあるように世界中を行ったり来たり。そのお忙しさの中でGS、BSの団委員をお引き受け願っています。目がねの奥のこやかな目と、素晴らしき美声は御存知の通りです。



カブスカウト隊が誕生してから丁度十五周年を迎えられたカブスカウトの皆さん”おめでとう”ここに心からお祝いの言葉をお送りします。

先日、皆さんから尊敬され信頼されていた団委員長の内藤中正先生を急に天国にお送りしたことはボーイスカウト全体の損失だけでなく、文字通りカブスカウトの育ての親である先生を失って皆さんもさぞかし残念に思っておられることでしょう。

しかし十五才といえは男子では立派な一人前の少年であるわけです。

カブスカウトもこのように大きく育ったからには田中先生を失ってもその遺志を受けついで立派に一人立ちしてどんどん成長して行けるに違いないと確信しています。

言うまでもなくスカウト活動の内での第一歩であるカブスカウトはもっとも大事なものではないでしょうか。カブスカウトの間にこそスカウト精神の基礎がしっかり植えつけられやすく「ちから」と「おきて」を早くから守れる時期だと思えます。キリストが「あなたがたの若い日に造り主なる神をおぼえなさい」といわれているように若いカブスカウトこそ、スカウト活動のうちに、また野に山に大自然の訓練のうちに神を見い出

## カブスカウトの皆さんへ

団委員長 内藤 正

しやすいと思います。神と人とに喜ばれるクリスマスチャン・ボーイスカウトはカブスカウトの間から、より多く、より早く育つに違いありません。

私は田中先生のあと団委員長を引き継ぐことになりましたが、これまで団のことに何一つ直接関係していたわけでもなく、スカウトについて何も知らないと言った方が早い位のものであります。また今の私の職務上、スカウトのために十分の時間を割

けないので皆さんの期待外れになることと思いますが、第四団発展のために何とかお役に立つようにできる限りの努力をして行きたいと思っております。

内藤 正——三月に亡くなられた田中先生のあとを受け、四月からボーイスカウト団委員長となられました。東工大の制御工学科の教授でいらっしゃるが、今は大学のことで御多忙中。新しいビジョンでスカウトのために、と張切っておられます。前の年少隊副長でローバー隊員の内藤君のお父様といった方が早いかも知れません。



## 「十五年を祝して」

県副コミッシヨナー 藤井 諭

東京第四団のカブスカウトの皆さん。此の度十五年を迎えられることは、ほんとうにお目でとうございます。十五年と簡単に言えますけど、その間にわたって、皆さんの苦勞というものは大変なものであったことでしょう。ふり返ってみれば組集會、隊集會……夏の舎營等においても数え切れない程の想い出が浮んで来るものです。そして当時結成された時は東京連盟に登録されたカブの数も少なく、私の記憶では二〇〇名にも満たなかったかと思つています。ところが現在東京には七〇〇名からのカブの仲間が居ます。そのカブ達も、東京四団と同じくカブ隊の足跡を一步一步と残しながら進んでいます。

そしてこの十五年間に入隊したスカウトの数とは大変な人数でしょう。又十五年前のカブ達は今はもう立派な社会人としておられることと思ひます。それに団としても長い経過から少年年長、青年の各隊も充実して来たでしょう。

そこで現実に眞のスカウティングの歩みは今が一番良い時期と思ひます。その意味において皆の成長したことは、それだけ団も發展し進歩したと言つて過言ではないと思ひます。

今年四月から新カブの基で新しい資料に従つてすべて活動することになつてゐることはすでに御承知と思ひますが此の十五

年間の皆さんの努力が貴重な資料として日本のカブの改正される参考となつたと思ひます。

こうして十五年間いやこれから何年も先においてもカブ活動を続けていく以上は両親、隊長、デンマザー、デンチーフの方々の携まない積極的な協力を是非必要だと思ひます。どうか東京四団の發展のためにも又日本のスカウティング發展のためにも、団家族と言ふ意味からも、一緒にいつまでもスカウトの道を歩みつづけようではありませんか。

いやさか

## 「吾輩はハットである」

第一地区副コミッシヨナー 小暮幹雄

吾輩はハットである。名前は無い。吾輩の先祖は、ボーイスカウトの創始者、ロード・ベーデン・パウエルによつて、ボーイスカウトのユニフォームに取り入れられた。爾來、吾輩の間は、何千万という全世界のスカウトの頭上に居座り続けているのである。吾輩は、今から十二年前始めてスカウトの頭に居座ることになった。この時、初めてスカウトというものに出合つた。このスカウトが今の主人である。以来吾輩は、主人であるK君とどこへ行くにも一緒についていく。ジャンボリー、隊



## 「十五年を祝して」

県副コミッシヨナー 藤井 諭

東京第四団のカブスカウトの皆さん。此の度十五年を迎えられることは、ほんとうにお目でとうございます。十五年と簡単に言えますけど、その間にわたって、皆さんの苦勞というものは大変なものであったことでしょう。ふり返ってみれば組集會、隊集會……夏の舎營等においても数え切れない程の想い出が浮んで来るものです。そして当時結成された時は東京連盟に登録されたカブの数も少なく、私の記憶では二〇〇名にも満たなかったかと思つています。ところが現在東京には七〇〇名からのカブの仲間が居ます。そのカブ達も、東京四団と同じくカブ隊の足跡を一步一步と残しながら進んでいます。

そしてこの十五年間に入隊したスカウトの数とは大変な人数でしょう。又十五年前のカブ達は今はもう立派な社会人としておられることと思つています。それに団としても長い経過から少年年長、青年の各隊も充実して来たでしょう。

そこで現実に眞のスカウティングの歩みは今が一番良い時期と思つています。その意味において皆の成長したことは、それだけ団も発展し進歩したと言つて過言ではないと思つています。

今年四月から新カブの基で新しい資料に従つてすべて活動することになつてゐることはすでに御承知と思つてますが此の十五

年間の皆さんの努力が貴重な資料として日本のカブの改正される参考となつたと思つています。

こうして十五年間いやこれから何年も先においてもカブ活動を続けていく以上は両親、隊長、デンマザー、デンチーフの方々の携まない積極的な協力を是非必要だと思つています。どうか東京四団の発展のためにも又日本のスカウティング発展のためにも、団家族と言ふ意味からも、一緒にいつまでもスカウトの道を歩みつづけようではありませんか。

いやさか

## 「吾輩はハットである」

第一地区副コミッシヨナー 小暮幹雄

吾輩はハットである。名前は無い。吾輩の先祖は、ボーイスカウトの創始者、ロード・ベーデン・パウエルによつて、ボーイスカウトのユニフォームに取り入れられた。爾來、吾輩の間は、何千万という全世界のスカウトの頭上に居座り続けているのである。吾輩は、今から十二年前始めてスカウトの頭に居座ることになった。この時、初めてスカウトというものに出合つた。このスカウトが今の主人である。以來吾輩は、主人であるK君とどこへ行くにも一緒についていく。ジャンボリー、隊



キャンプ、ハイキング、奉仕活動等、主人の行く所すべて吾輩はおともするのである。そして、主人と共に苦勞をしたり、善びを味わったりしてきたのである。では、吾輩がいかに主人のためにつくしてきたかをお聞かせしよう。

吾輩は、ヘルメットより軽く、別にハデな飾りもいらなく、色々な作業や活動にも便利だし、工夫すれば色々な事に使えるのである。巾の広いつばは強い日光をさえぎり、皮膚を守り、日焼けや日射病を予防するのである。寒い時は、つばで耳をおおえるし、ブッシュ（草むら）の中を通る時は、前へ深くかぶれば目を守ることもできる。そうそう、ジャンボリーの配給の時、入れ物がいっぱいになってしまったので、主人は吾輩にジ

吾輩でねずみを  
つかまえるとは！！??



ヤガイモを  
入れて隊の  
テントサイ  
ドまで運ん  
だこともあ  
ったつけ。  
また、キャ  
ンプの炊事  
の際、火を  
起すのに吾  
輩をうちわ

がわりに使ったりしたこともあった。夏の暑い時は、主人は吾輩であおぐと、とても涼しそうである。ハイキングで、野原で昼寝をする時顔におけば、虫にさされないですむ。いつだったっけ、一泊ハイキングに行った時、炊事の火が芝生に燃え移ってしまったことがある。その時主人は少しもあわてず、サツトそばの小川に吾輩をつっこみ、水をくんで火にかけた。おかげで火は広がらずに済んだ。吾輩はともつめたかったが、山火事になるのを防いだのだから、それくらいの事はがまんした。主人が年をとるにつれて、吾輩も年をとってくる。この頃ではすっかり毛もなくなり、骨がぬけたみたいになってしまった。時々主人は吾輩を水につけ、アイロンなるもので吾輩の体に、力一ぱい押しつける。そうすると吾輩のつばはピンと平らになる。しかし、雨にぬれたり、日がたつとまたもとの通り、よれよれになってしまふ。そこで主人は考えた。つばに透明ラッカーをしみこませることを思いつき、さっそく手術にとりかかった。その結果手術は見事成功、つばはピンとなった。しばらくの間はこれで安心安心。

吾輩は多くのほこりを吸っている。つまり吾輩は誇り高きハットである。再到誇れることは、主人は何よりも吾輩を愛してくれていることである。吾輩は、一生主人と苦勞を共にし、難関を乗り越えていきたいと思う。このような器用な吾輩をユニフォームに取り入れて下さったBIP卿に感謝しようではありませんか。





## 近所の団から こんにちには

いつもげんき!

東京第二八六団  
副長 美藤 章

四団のカブスカウトのみなさんこんにちには!

十五かい目のおたんじょう日おめでとう!

十五年前のさいしょの発団式で、ある人が九才で入隊したとすれば、その人はもう今では二十四才のりっぱな青年になっています。そして、その人は今でも小さいときのカブスカウトのいろいろなことを決してわすれてはいないでしょう。大きな声でいつもげんきといったこと。「ぼくはまじめにしっかりやります。カブ隊のさだめをまもりまします」とみんなで声をそろえておぼえた、カブ隊のやくそく。そして「カブスカウトはすなおであります。カブスカウトはじぶんのことをじぶんでまします。カブスカウトはたがいにたすけあいます。カブスカウトはおさないものをいたわります。カブスカウトはすすんでよいことをまします」の五つのさだめ。夏のキャンプのいろいろな楽しいおもいで。キャンプファイヤー。いたずらをして隊長にしかられながらも、きびしくしつけられたこと。やさしいデンマザーのこと。

いまでも十五年前のカブスカウトのことがありありと思ひ出されるでしょう。そして、二十四才の青年になっても、カブスカウトのときおしえられた「せいしん」をじっこうし社会のためになやくだち、少しでも社会をよくしていこうとする、ゆる

きのある、ゆめをもった人になっていることでしょう。

いま、カブスカウトで身につけていることがどんなにたいせつなことであるか、みなさんがひとりひとり、りっぱな青年になったときにはつきりすることです。

いつもげんき、というカブスカウトのひょうごは、スカウトたちがいつもけんこうで、心が正しく、いつも心にゆめをもっている人になることのみをもっています。

十五かい目のおたんじょう日をむかえるにあたって、スカウトのみなさん一人一人がしんけん、いっしょうけんめいにスカウトのたましいを身につけ、じっこうできるゆるぎのある人になってほしいといっています。

わたしたちの二八六団のカブスカウトはきよねんの十一月に発団したばかりで、一ねんめにもなっていないません。まだよちよちあるきですがみんなげんきにしゅうかいにしゅっせきしています。わたしたちの二八六団は四団のみなさんときょうだい団になってもらっています。いろいろとおしえて下さいね。

今年から、日本れんめいのけっいで、カブスカウトがきびしくなりましたね。りす、うさぎ、しか、くまとそれぞれ道のしゅうとくかもくをかんぜんにおさめないとしんきゅうでなくなりました。それで、みんなあたらしいカブブックをもってはりきっています。しゅうかいのときには、みんな家でべんきょうしてお母さんにサインをもらったかもくをうれしそうにリーダーのところにもってきています。二八六団のカブスカウトも十五ねんもせんぱいの四団のカブスカウトにまけないようにいっしょうけんめいがんばりたいと思っています。いまは、



カブ隊、一隊だけしかありませんが、やがてはボーイスカウトをつくらうと思っています。そして、ぜんいん、カブスカウトのしゅうとくかもくをおえ、つきのわもおえてボーイスカウトに入隊できるようにしたいと思います。スカウトのうんどうはカブからボーイへ、ボーイからシニアへ、そしてシニアからローパーへと、一つずつ進むことによって、よりじゅうじつすることですし、一ぼ一ぼと前に進みながら、つづけていくことがたいせつだからです。

みなさんの四団のカブスカウトが十五ねんかんもしっかりとつづけて来たように、みなさんのひとりひとりが、これからさきも、しっかりとスカウトのうんどうをつづけていって下さい。それは日本のスカウトうんどうの大きな力にもなると思います。ほんとうにおたんじよ日おめでと。

美藤 章一 元靈南坂教会伝道師でボーイスカウト副団委員長、やさしく、厳しい人柄、現在は中目黒教会牧師、二八六団カブスカウトの副長として活躍中。

## 僕たちと四団

東京第一六四団 真島英郎

一六四団には、シニア、ボーイ、カブだけが、四団には、ガールスカウトがある。四団のカブスカウスは、はじまってから十五年だそうだ。十五年といっても、ずいぶんいろいろなことがあつたと思う。一六四団は十年だけけれど、隊長の話しても、

「十年間はつらくて長かった。けれどそれなりにいい思い出があった。」と、おっしゃっていた。それよりも五年も先にはじまっていたのなら、つらく長いがしかしいい思い出があったと思う。

ぼくたちの中で、四団の人がいる。その友だちは、四団はともいいといっている。ぼくが四団でいいと思っていることはバザーがあるからだ。一六四団は今バザーをしない、バザーはいい品物は、とてもやすいし、おいしいものは、やすいということがぼくがいいと思った。まだぼくがいいと思っっていることは、クリスマスパーティーの時、ぼくたちの団は、カブだけでやるが、四団では、ブラウニーもいっしょにやるということだ。それは、パーティーは、人が多ければ、多いほど、楽しくてゆかいなものだとぼくは思っているから、いい。四団のともだちがいいといっていることは、「土曜日だから、長いじかんみんなと、ゲームしたり、いろいろな、ロープのむすび方などをまなべる」といっていた。それに、おやつが、でるからいいといっていたし、月に一ど、銀やしょう金やしょうを、もらうしきがあるそうだ。

一六四団一日曜の午后、土の匂の少ない空の下で、遊ぶ楽しさ、皆で協力することの大切さ、そのチャンスを子供に提供したい。カブブックに捕われすぎないプログラムの進行、そう隊長は言います。一六四団ののびのびしたスカウティングがうかがえますね。



東京第一五三団

発隊して十五年になるんだってね。おめでとぅ！

隊を「木」にたとえるならば、君たちの隊は年輪が十五あるわけだね。ほくらの隊は、まだ四つしかないから、君たちの方が三倍もあるんだね。

だけど一つだけ同じ事があるんだ。それはね、今カブ隊に入っている君たちも、そしてほくらも、年輪の一番外側の輪を作っているという事なんだ。

ほくたちのせんばい、のスカウトたちがみんなまじめに、しっかりやってくれたおかげで今までの内側の年輪ができたんだ。だから、ほくらしもしっかりして、もう一つ新しい年輪を「隊の木」に付け加わえなければならぬんだ。お互いにガンバロウね！

もう一つ、わすれてはならない事があるんだ。それは、この「隊の木」をそだてるために、水をやったり、虫をとったり、嵐から守ったりしてくれる人達（隊長、デンマザー、デンチーフ、父兄、ほかにも沢山いるね。）がいたという事なんだ。ほくらも大きくなったら、デンチーフとして、リーダーとして、父兄として、あるいは団委員として、この「木」がいつも元気にのびるように、世話をしたいと思っっているんだ。その頃にな

ったら、もう一度君達の「木」とほくらのことをくらべてみないかい？ とにかく近くの団のカブ隊が十五周年をむかえた事を隊をあげて喜んでいきます。

東京四団の皆さん「十五周年記念」おめでとぅ！

- |       |       |
|-------|-------|
| 月の輪組長 | 府川 雅彦 |
| 一組 組長 | 近藤 勇樹 |
| 二組 組長 | 柏原 和弘 |
| 三組 組長 | 野崎 一徳 |
| 四組 組長 | 陰山 貞三 |

十五周年記念 誠におめでとぅございます。

あなた達の後に道があり、あなた達の前にも道がある。前途洋々。これからも頑張って下さい。デンマザー一同

ガンダパンレカトブウスキカウウトヨノ（暗号文）

環境も良いし、設備も整っているし、リーダーは抜群だし、これにくずれるようじゃもうだめだな。

年少隊々長 井上 健

一五三団「スイスカウトより発団、そのためシンボルマークは錨に十字架である。今年の四月に五周年を迎えた。



半分のダイヤ  
のジャック



山梨連盟県コミッシヨナー

飯田 貞雄

だれかが「さあ、ついたぞ。」とさげんだ。バスの窓からそれを見ると、ひろびろとしたみどりの草原の中央に、スイス国旗と日本の国旗がならんで、へんげんとひるがえっている。そのまわりには、まっ赤な帽子をかぶったカブヤボーイスカウトがおおぜい手をふっている。村の人たちも集まっているではないか。ぼくたち日本のスカウトをでむかえてくれたんだと思うと、思わずうれしさがこみあげてくる。

バスをおりる。拍手がおこる。ぼくたちは手をふってこたえらる。しばらくして、交歓行事が開始された。簡単なあいさつとスカウトソングの交歓がすんだところで、一人ひとり一枚のカードがわたされた。よくみると、右の方にふるぼけたトランプのダイヤのジャック半分がはってあり、その横に日本語で「バリセレンに到着歓迎」、ドイツ語で「バリセレン——番地シュラッヘルの家へ」とかいてある。何をするのだろうと思っっているうちに、「これからカード合わせのゲームをします。」というアナウンスが聞えてきた。

台図がなった。いっせいに何百人ものスイスのスカウトと日本のスカウトが動きだした。ゲームはトランプの半分の相手をさがすのである。あちこちで、歓声があがる。たがいに握手をするもの、だきあうものもある。

そのとき、赤と白のネツカチーフをした色の白いボーイスカウトがニコニコしてやってきた。もっているカードをのぞくと、まさにジャックの半分なのである。「あった、あった。」と思わずさげんでしまった。その少年は礼儀正しく上手な英語で自己紹介をし、これから、いっしょに彼の家に行くのだと説明してくれた。あつげにとられてみると、ほかの日本のスカウトたちは、もうそれぞれスイスのスカウトにつれられていくではないか。

あとでわかったことなのだが、このゲームは実はその夜日本のスカウトがとめてもらう家をきめるものだったのである。なんてゆかいなゲーム、なんてスマートな家庭分宿の方法なのだろう。

その夜、彼の家にとまり、シュラックヘル一家から大歓迎をうけ、忘れることのできないひとときをすごしたのはもちろんであった。

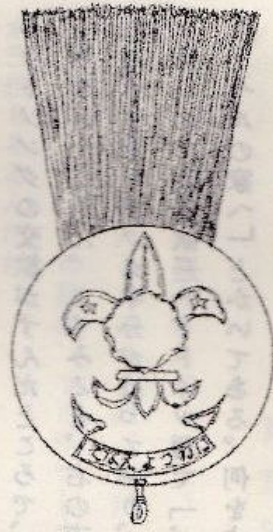
× × × × × ×

これは、第十一回世界ジャンボリーに参加したかえり、ヨーロッパ横断バス旅行でスイスのバルセレン村へ立寄ったときのできごとである。

ぼくは、あのとときのダイヤのジャックのカードをいまでも宝物のようにたいせつにしている。  
(少年隊五代目隊長)



歴代の隊長



志水隊長

杉原隊長

万石隊長

大島隊長

カプスカウトと共に

二代隊長 杉原正

花蒸る四月二十日、青山墓地の三島前総長の墓前にて指導者実修所の修了証の伝達式が行われました。カブの指導者実修所の修了証の伝達は、毎年、三島先生の御命日に墓前で行われており、本年も私は、隊長として御奉仕させていただきましたので山口所長のお供をしてその席に参列しました。昨年十月、秋深い山中野営場での厳しくもあり、楽しかった六日間の生活のしめくりでもありました。修了証の伝達を受ける人々のなかに、第四団の里見、片岡両副長の顔があり、私にとっては記念すべき日となったといえます。昭和三十三年、第四団のカブ隊に若いデンマザーが誕生しました。そのメンバーの一人が里見現副隊長であり、その時のカプスカウトの一人が、片岡現副隊長なので、私はここにカブ隊十五年の歩みをみただけからなのでしょう。デンマザーが副長に、カブが指導者に、その二人が同じ実修所に入所したことは、これからのカブ隊にとって大きな影響を与え、第四団のよりよき前進の礎となることと期待しています。昭和三十年、私は志水初代カブ隊長からパトントンタッチを受け、十九才の若い代理隊長としてスターとしました。準備隊として

隊付の一年、二十九年の創立からの副長補としての一年の経験浅い隊長の出現となりました。右も左もわからないカプスカウト活動において、デンマザーの必要を痛感したのは、その年の五日市の舎営でした。帰ってからすぐおかあさん方にご無理をお願いして講習会に参加していただきデンマザーの必要性を説いたのでした。その年にデンマザーを各組に置くことができ、各家庭を巡回する楽しい組集会でした。その時のデンマザーの一人が、現一五六団のカブ隊長の大和さんです。若い隊長としてデンマザーをコントロールすることができず、昭和三十三年、大学年代の若いデンマザーの誕生になりました。この時のデンマザーが里見さんであり、団委員の萩原、高島（旧姓渡辺）さんもそのメンバーでした。第四団の今の各隊の副長、副長補は、その時のカプスカウトであり、片岡副長、松田副長補もその一人なのです。私からパトントンタッチをうけた第三代隊長は万石さん（カブ隊三期生）であり、第四代目の現大島隊長は、カブ隊の第一期生でもあります。カブ隊から育った者が、カブ隊の指導者になることをみて、心強く感ずるのは私だけでないでしょう。望むことは、十年先、カブ隊出身のおとうさん隊長の出現を是非期待しています。本年からおかあさんデンマザー（デンマザーは、本来からおかあさんであるが）第四団でも再現し、団委員にもおとうさん方に加わっていただいたので大いに心強く思っています。三月亡くなられた田中前団委員長の後任に内藤先生（五期生内藤正樹君）ローバー・メイトのおとうさん）をお迎えすることができたことも、第四団が新らしく発展することになると思います。

杉原 正一十九才にして年少隊二代目隊長となる。以後年長隊長、四団副団委員長として活躍された。今もってスマートなハンサムボーイである。



三代隊長 万石俊夫

カブスカウトの皆さん

十五周年おめでと

十五年間と一口にいってもわからないでしょうが、制服が出来て初めての七人のスカウトが今はもうローパスカウトの隊付になってしまふ位の長い間ですね。その長い間には、作曲の大変上手な志水隊長。とつてもおしゃれな杉原隊長や素敵なデンマザー（時にはこわい時もあったけれども）。それから素晴らしい兄貴のようなデンチーフ、色々の人達がカブ隊の為に奉仕をして下さいました。その中でほんの少しの間ですけれどもリーダーをやっていたのがほくです。前に隊長をやつてらした杉原さんが大変立派な隊長でしたのでほくには荷が重そうでした。がやる以上はがんばろうと思ひました。さてその第一回目の集会、いままでに開会式は何回もやつてはいましたがこれほど緊張した開会式はありませんでした。全員集合のホイッスルが教会の庭に響きました。多勢のスカウトが集まつて「デンデンデン」「いつも元氣」ほくの気持もしらないで元氣良く大きな声でカブコールの始まりです。なにしろこのカブコールがほくはいやでいでしょうがなかつたんです。なにしろ生まれつき音痴なのでカブコールの時はどうしようかと前日から考えつづけていたんです。でもここまで来たら度胸をきめてと「リス」「リス」おっ調子がいいぞ「ウサギ」「ウサギ」……「月の輪」

ウエウエウエーとさんとか終り国歌を奏げて無事開会式は終りました。その後はゲームをしたり、歌を唱つたり二時間の集会の長かつた事、それでも一カ月位たつと集会にもなれ冷汗をかかないですむようになった時に父兄会がほくを待っていました。なにしろ自分の母親位の（もつと若い方もいらつしやいました）御父兄にああして下さいとかこうして下さいとか肝玉の小さいほくには大変な仕事でしたけれども父兄の方達が大変協力して下さいたのでそれほど冷汗はかかなくて済みました。

六月には十二周年の式典も無事に済み、スカウト待望の舎営の季節になりました。舎営の場所は伊東のユースホステルにきまつていましたが一緒に行っていただく父兄の方、奉仕をしてもらうローパスもきまり七月二十一日に東京駅を後にして伊東へと向いました。

舎営期間中は天気にも恵まれ、山あり、海あり、囲りはゴルフコースという環境の中で山へ登つたり、海で遊んだり自然を感じながらたつた四日間という短い期間でしたけれども楽しい舎営でした。ともかく二十四日に東京駅に着いた時にはほつとしたようなつまらないような気分でした。とまあ一年間の短い期間でしたがデンマザーの皆さんや父兄の方達が協力をして下さつたのでなんとかがポロを出さずにやつてこられました。本当にありがとうございます。

最後にカブの諸君本当に十五周年おめでと、そしてローパスカウトで会うのを楽しみに待っています。



## がんばろう

隊長 大島啓義

汗をかきながら、六本木のながい坂を下って、やっと平らになったと思うとまた急な坂を登ってハアハア息をつきながら開会式に出たこと、集会で近くの広場に行つて、どろんこになつてあばれまわつたこと、昼間でも気味がわるくて入れなかつた礼拝堂、行くのがたのしみだつた細い曲りくねつた階段をのぼつていくB.Sの集会場。

カブの時は、とても教会が大きく、集会でやるゲームや話、歌、なんでも楽しみでした。又シニヤスカウトやリーダーの人たちといっしょにあばれたり話ができるのも楽しみでした。

その時から十五年。

道も、建物も、広場もずいぶん変わりました。スカウトの諸君はどうでしょう。

遊び場も少なくなつたし、自動車があふえて危険なことも多くなりましたが、いつでもいたずらをするのをさがしたり、あぶないことを平気でやつたり、友達ととっくみあいのケンカをしたり、あばれることが好きを子供であると思います。

でも、もし君たちの中に、カブにきててもあまりおもしろくないと思つている人がいたら君たち自身にも、もんだいがあると思ひます。

毎週の集会のプログラムは完全にできているでしょうか。デ

ンチーフやデンマザーがいないときでも組集会はできていますか。

家にいれば、テレビを見たり、もけいを作つたり、好きなことのできるのに、かけ足をしたり、せい列れんしゅうをしたり、なわむすびなどするのにあきている人はいないでしょうか。

これにはくふうが大切です。家にいる時、学校にいる時、カブにいる時、それぞれ場所にあつたくふうが必要です。

たとえば、集会で歌やゲーム、話、なわむすびなどをならつた時には、家に帰つて、みんなに教えたり、学校で友達とゲームをしたり、ふだんやっているゲームでもルールを少しかえたり、また家や学校でおもしろい話や歌をみんなに教えたりするのは、それからひまな時にはリーダーの家に遊びに行つたりピクニックの計画をたてるのもよいでしょう。カブに行く時でも、行く道をかえたり、地図をつくつたり、どういふ店があるか調べたり、おもしろいくふうや考え方がいろいろできると思ひます。

それと同時に、遊ぶ時、きちんとする時、歌をうたう時、それぞれ区別をつけることです。

スカウトはスカウトらしく、ゲーム、歌の時は思いきり元気よくできる子供になつて下さい。

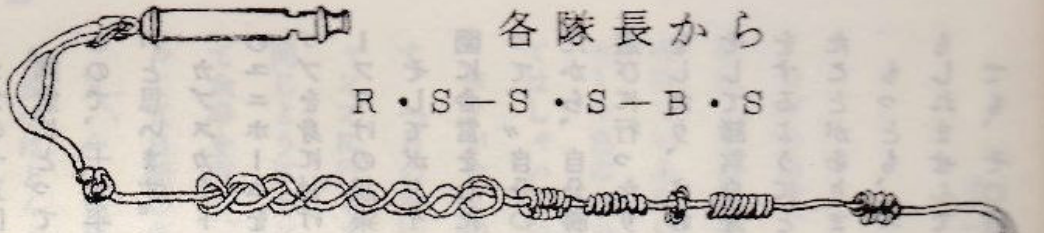
これから四団のスカウトを良くしていくのは君たちです。

がんばりましょうね。



各隊長から

R・S—S・S—B・S



カブの起り

ローバースカウト隊長 今田富士雄

ボーイスカウト運動は、BPの書かれた「少年の為の斥候術」(一九〇八年)を見て、英国の少年達が自発的に班を作って、英国はおろか欧州にまで広まったのです。

一九二〇年に第一回の世界ジャンボリーがロンドンで開かれ、その会場で、一人のスカウトから、BPは世界の総長に推せんされました。このように総て少年達の自発活動で大きく発展していったのです。

カビングも例外ではありません。スカウト年令に満たない弟達や、少女達(後にガールスカウトが生まれる)は、まねごとを始めました。そこでBPは、ジュニアスカウティンクというプログラムを考えましたが、さらに探し続けて、キプリングのジャングルブックに、遊びと信頼を通じて子供達の公民教育の方向を見つけ出しました。キプリングとBPは古くからの友達でしたので、これを取り入れる許しをもらい、一九一六年にウルフカブのハンドブックを出版しました。そしてカビングは急速に英国内に広まりました。丁度その頃は第一次大戦中でしたので、男子の成人リーダーの不足から、婦人リーダーがスカウト運動に初登場しました。

さて、四団のカブは十六年前の二十八年四月から、志水隊長を中心に活動を開始し、二十九年六月に発隊した訳ですが、そのずっと以前に、カブ第一号が居りました。

発隊五年前の二十四年に一人の坊主頭の小さな少年が四隊に入って来ました。彼は未だ十才なので入隊は出来ませんでした。「おみそ」として毎週土曜日、吉祥寺から満員電車で一時間以上もかかって通いつめました。

大きな隊員の中で彼はもまれましたが、負けじ魂を発揮してがんばり通しました。

やがて初級、二級、一級と進級し、二十九年三月には、全国三十六名の名誉スカウトを選ぶ東京連盟の特別訓練キャンプに、四隊から二名が参加し、非常にきびしい訓練を受けました。彼はこの関門を突破し、東京連盟の第一ランクで名誉スカウトに選ばれました。

三十四年にはフィリピンの第十回世界ジャンボリーに、四団の年長スカウト四名を連れて参加、三十七年年長隊長となり、翌年コーネル大学に留学、現在国連の専門職員として働いている安積発也君こそ、四団のカブ第一号として本当のスカウティンクを実践し続けているのです。

四団の先輩には、スカウティンクを通じて広い分野で奉仕をしている人が沢山居ります。

精神薄弱児問題で、飯田元少年隊長(山梨大助教授) 社会福祉問題で、小崎元副団委員長(名古屋社会館々長) 北海道に獣医として志水元カブ隊長と教えあげればきりがありません。

カブ隊も十五周年をむかえましたが、四団のよい伝統を受け継いでこれからの十五年に向って前進しましょう。



## カブの諸君へ

ボーイスカウト隊長 柳 健一

カブの諸君、十五回目のお誕生日おめでとう。ボクは、十五年前、大島隊長と一緒にカブになりました。その頃はまだ皆が今着ている青いユニフォームがなくて、ボーイスカウトと同じカーキ色のユニフォームに、黄色のカブのネツカチーフをつけてはしゃいでいました。

ボクがカブの頃、楽しかったのは、ハイキングやキャンプです。「月の輪」の夏に、秩父の「みょうがさす」という所へキャンプに行きました。ボーイスカウトのキャンプにくっついて同じようにテント生活をして、杉林の中に入って、マキを拾って食事を作り、荒川の上流の小さなせせらぎで水を飲み体を洗って五日間のキャンプをしました。

又、今の多摩動物園のある「多摩丘陵」は、その頃は、まだ人家はほとんどなく、良いハイキングコースでした。谷間には泉が湧いていて、その泉の水でよく炊事をしたりしました。

このようにボクのカブの時代は野外ですごす機会が多くとても幸せでした。

今、四国のある養育院には世界一大きな都立の、と真ん中であって、自然に接する事のむづかしい所です。地面も建物も周りにある全てのもの鳥や花までもが人工的で、人間がなんにも手を出さなくても鳥や花が育っていく「大自然」がある事を知る機会が少なくなって、今のカブの諸君は不幸だと思います。

でも、自然の素晴らしさを知る事は、カブの諸君にとって、大きく成長するためのたいせつな栄養です。都会の生活しか知らないで成長すると、栄養失調と同じでかたわな「心」が出来てしまいます。

そして、努力をすれば、まだまだ素晴らしい大自然の近くに行く事が出来ます。

カブの諸君、早く大きくなって、ボーイスカウトに入ったら、楽しい仲間といっしょに森の中にテントをはって、皆と協力して、快適なキャンプ生活をしようではありませんか！





## カブの諸君へ

シニアスカウト隊長 日下部英一

カブの十五回目の誕生日オメデトウ。

諸君にとっては、三年間をカブスカウト活動として過すだけなので、十五年という長い年月を流れとして見ることはできないと思います。

カブスカウトのクマの年に入隊した僕は、カブスカウトの紺のユニホームを着ず、ボーイスカウトのユニホームにカブキャップを身に付けて、集会に参加し、デンマザーのいないデンチーフだけの組集会をやっていたことを思い出します。

そしてボーイスカウトに上進し、デンチーフとして箱根小涌園に舎営をした時、自分でスカウト諸君の手伝いをするにあたって、自分のことは自分でする。皆と一緒に舎営をするのだから、自分勝手なことゝたとえば、食事の時間なのに、外に遊びに行ったり、他のスカウトが疲れて寝ている時、大声で話をしたり、さわいだりすることは、厳しくやめるようゝにし、そして諸君自身の舎営をするのですから、自分から進んで仕事をしようかと考えて、時間を守らせ、楽しいキャンプを過ごしたことがあります。

もっとも、スカウト諸君にとってはきびしく、大変なものかもしれませんが。

でも、その時スカウト活動は学校の勉強をして家に帰るとい

うのと違い、一緒に家族の人からはなれて、泊まるという別の生活をするのですから、それ位のこととは当然だと思います。

明治維新を前にして、勝りん太郎という人が「かんりん丸」でアメリカに最初に日本人として航海した時、小さな舟に水を積んで行ったのですが、途中で水がなくなるのが早く、節約しなければならず、船員に、きつく、飲み水しか使わないよう、命令した時があります。その時、アメリカ人が水先あん内として十数名の軍人と船員が乗っていましたが、その船員の一人がその大切な水を使って洗たくをしているのを見て、日本人が怒り、ケンカになった時、アメリカ人の軍人が、その様子を見てとめに入り、日本人より話を聞くと、その洗たくをした船員を切って下さい、と言って、その頃日本人をあまり認めていなかったアメリカ人が当然、その船員のかたをもつと思っていた、勝りん太郎をおどろかせ、改めて、団体生活のきびしさと、軍人の態度に感じ入ったと本に書かれているのを知っています。

勿論、日本人として最初の航海ということ、水もない大海原と、日常の何不自由のない生活とはおのずから違うと思います。どうか、スカウト諸君も、一度団体活動をするにあたって考えてみて下さい。それが十五周年が一つの式典で終えてしまいか、もう一度スカウト活動を見なおす一つの手段になるかもしれません。



おもいで



少年隊 三島完治

ぼくは小学校三年のときカブスカウトにはいった。  
はいたばかりの時は、からだもよわく、すききらいがたく  
さんあった。はじめての舎営の時は、デンマザーやデンチーフ  
にせわをかけた。

今から考えると、あんなことをやってよかったのか、またあ  
そこはもっと努力するべきじゃないかなどとおもうことがたく  
さんある。

カブで学んだことを自分では役だてようとしているがどうも

よくできない。しかし何かの面で役だてようと努力したい。

今から考えれば、カブスカウトの時代は長かった。たのしい  
ことも、くるしいこともいっぱいあった。

でもぼくはそれをのりこえたんだなア。

## ぼくの夢

少年隊 坂井 宏

ぼくが今「カブ」と言われたら何を連想しますかと聞かれたと  
としよう。おそらくぼくはデンマザーとこたえるだろう。なぜ  
って、ぼくがあげられんぼろだったせいかもしれないが、よくデ  
ンマザーにおこられたからだ。でも、デンマザーにおこられ  
ばおこられるほどおもしろくなっていたずらをやめられなくな  
ったことをおぼえている。こんな時デンマザーはたいいていデン  
チーフに助けをもとめることにそうばが決まっている。しかし  
このデンチーフと言うやつがまたやっかいだった。デンチーフ  
はデンマザーとちがいが手かげんしてくれないからたいいていおさ  
えつけられてしまったものだ。しかしこんなときあとでなくさ  
めてくれたのもデンマザーだった。今になって考えてみると、  
デンマザーにあまえる気持でよくいたずらをしたんだなアと思  
いなんだかてれくさくなる。

カブの思い出をどんどんさかのぼっていくにしたがって、キ  
ャンプの思い出がうかび上ってくる。中でも印象深くのこって



いるキャンプは、普通のキャンプである。ぼくたちのとまったユースホステルのまわりには多くのウルシの木があって背すじがぞくぞくしたが、強がってわざわざウルシにさわりっこしてからだじゅうにぼつぼつができ、キャンプからかえってきてから一週間も医者がいしたのを覚えている。しかし今になってみるとそれが幸になっている。なぜって、ぼくはそれ以来ウルシにさわってもなんともないようになってしまったからだ。又このキャンプでもおもしろかったのは湖で泳いだことだ。ぼくは、小さかったので湖のふかいほうにいかせてくれなかった。それでしかたなしにあさいところであそんでいて、すこしずつ深い方に行った。そしてけっきょく最後にはみんなより深いところであそんでいた。

こんなぐあいではぼくのカブ生活はいたずらであけ、いたずらでくれた。だがぼくのやっていたいたずらは人にめいわくをかけるような、悪いいたずらは、けっしてやらなかったことは今でもはっきり言える。

又、ぼくには、カブ時代からの夢がある。それは、カブの隊長になることである。ぼくはこのあいだまでデンチーフをやっていたが、デンチーフをやったことよっていつそその夢を現実にしたという気持が高まった。ぼくみたいな夢をもったカブもたくさんいると思うが、そういう人はその夢をじつげんするためにはスカウト運動に大いにはげんでもらいたいとおもう。

## キャンプの思い出

年長隊 小松正太郎

僕がカブにはいったのは、ちょうど今から八年前のことである。

その最初のキャンプは秩父のユースホステルで、バスから降りて少し登った丘の上にあった。その当時は、ダムの記事をやっていたところで、ホステルのそばにあき屋があって、そこを「おばけ屋敷」といって夜探険にいった。次の日またそこに行ったが、はいるのがなんとなくわかった。今考えればまことにくだらないことである。あと湖一周ハイキング、途中にあってつり橋がとても長く感じた。ダムについて、ダムの上から下を見たとき、川の中にすいこまれるような気がした。

次のキャンプが伊東のユースホステルであった。ホステルの裏庭がとても広く芝生でおおわれていたような記憶がある。ちょうど組長のときであった。ハイキングは、そばの山に行った。山の名前は、わすれてしまったが、追跡サインで登って行った。現在その山にはケーブルカーが出来ているらしい。あとキャンプファイヤーの直前に足をねんざしてしまったことや、伊東の海岸で泳いだ。泳いだというよりも、波があらかったので水あそび程度であったがとても楽しかった。

あとキャンプ中に編んだチーフリングをいまもってしている



が、そのチーフリングをしていると、カブのことをときどき思い出す。

最後のキャンプは、西湖のユースホステルでおこなった。このときはあまりよくおぼえていないが、道のそばにたっていた標識に「自殺者立入禁止」と書いてあった。書いてあったことがおもしろかったせいかな今だに記憶に残っている。ハイキングの場所はわすれてしまったが湖を半周したあたりから船に乗ってホステルにもどってきたことだけおぼえている。

キャンプのほか思い出すことは、ふだんの集会よりも、むしろ浜離宮や新宿御苑に弁当をもって行って、ワイドゲームや歌などをして遊んだことのほうが印象強く残っている。

あのころは、集会中に今よりもっといろいろな歌をしじゅう歌っていたような気がする。それに現在のカブよりも、自然の中で活動することが多かったということがいえると思う。

## カブスカウトの人たちへ

青年隊 針替茂人

スカウト生活も十年を過ぎ、いまカブスカウトのことを思うかべるとまず頭にうかぶのは、きびしい訓練と楽しい歌やゲームのことです。その時はただ夢中になって過ごしてしまっただが、今、考えると本当に充実した期間だったと思います。又ロバースカウトとなった現在、同年代の人がカブのリーダーを

務めているのを見てはじめてカブスカウトの重要さを感じました。カブスカウトはスカウト生活の出発点ともいえる大切な時期ともいえるでしょう。

土曜日の午後、カブスカウトが紺のユニフォームにつつまれて元氣よく飛びまわっているのは、なんとも気持のいいものではないでしょうか。

まだスカウトというものがどういいうものであるかなど全然気にしないで、一直線に歩いていくあの姿は、みなが忘れてはならないものだと思います。

カブを卒業して、BS、SSとすすむにしたがい、知識と経験をたくわえ、一人一人自分の個性をたかめていこうとすることは、スカウトだけの特権ともいえるでしょう。

私もカブスカウトからいまままでスカウトとして生活をおくってきて、おもいきって活動できなかったことをもの足りなく感じるものがたびたびあります。ですから私がこれからリーダーとなったら、こんどは新しいスカウトにこういうことを経験してほしいと思います。

スカウト制度は青春を思いきり発散させることのできるころだと私は信じています。だからカブスカウトの人たちに、おもいきって若さを発揮してもらいたいと思います。失敗にじけず、すぐ立ちなおって自分の力をためてほしいのです。スカウト生活には苦しいときや楽しいときなど種々多様ですが、



「……スカウトを出る時、またはリーダーとなったときに、スカウト生活をやってきて本当によかったと思うことができるようになってほしいと思うし、もしこのことが本当に気持ちにあらわれたのなら、あなたはかけがえのない大きな自信というものを持つことができると思います。」

最後に一言いわせてもらいますが、スカウト運動は与えられるものではなく自分が行なうことであることをつけくわえます。

### とりとめのない話

青年隊 川田裕人

……しました。どうしてってなぜだい。そんな事言ったって分かる訳ないだろう。シェークスピアが芝居に出たところでカブがよくなる訳はない。マクベスにしたところで腹痛（はらいたと読みふくつうとは読まないというところが作者の意図である。）は直らないと思っただが四十四字も書いたので直ってしまいました。けれども近ごろのカブは元気がないな。歌でも歌うか。正直じいさんポチ連れ敵は幾万ありとてももから生まれたものもしかあかあからすがはとほっほほっほほっほととんであそべらぼうでこんちくしょうでやっつけろさつきは鯉の吹き流しな

なんて間がいいんしょうじきじいさんほち連れ敵は幾万ありとも。そろそろあきたので新幹線に乗るとしよう。発車オーライとバスが着いた。かれは年をとっていたのでおながすいた。「もちっと口のきき方を気をおつけなさい。」と汐見はベッドの上で静かに言った。来年は万国博だよ。ところで西発喃温泉でのキャンプはカブの十周年の年でしたね。そうでしたかしら。でも僕の心の奥深いところで神を信じていたらそれこそ無教会じゃないだろうか。泥んこになって遊ぼうよカブちゃん達。お洗濯には「〇〇」。真の孤独というものは、もう何によっても傷つけられることのないぎりぎりのもの、どんな苦しい愛にでも耐えられるものだと思うね。

やっぱし人間大きくなきゃいけないね。僕はでっかい男になりたいな。カブ達も都会の中で小さくこそせしちやいけないよ。すると老人は小さな食堂に入り三十円のきつねを食べた。

きつね、きつね、きつねはどこだコンコンコン、コンコンコン。こちらでござる。ざるじゃないきつねだよ。（きつねはぬ料のほにゆる動物。形は犬ににて小さくやせ、口が突き出て尾は太くて長い。性質はずるい。）アイスクリームとガスバーが言うが僕は里見にいさんにつかまっているのでまだこんなとりとめのない話を書かなければならないという事にアメリカと中国との危機を感じ、カブはもうダメかと思えます。それでも僕は手をメガフォンにして、おおい、おおいと二度程声を張







ばよいのですが、少年隊では、班長の言うことを聞かねばなりません。ここで、目上の者の言うことを聞かねばならないことに關しては、同じ様なことに思われますが、少年隊では、班長が、班員の意見を聞き、グリーンバー会議で、決定したことが、班長の命令になるのですから、自分達の、やりたいことが出来る訳です。

この様に、スカウトとは、一つの隊だけでやめてしまうのではなく、自分のやってきたことが、本当に良く理解出来る訳がありません。だから、人から言われた通りにするのではなく、自身で、良く考えて、スカウトを、いつまでも、続けてほしいのです。

## カブ隊の 発展のために

少年隊副長 大内 丘

カブのスカウト諸君、十五周年おめでとうございます。一口に十五年といっても、リーダーとして、デンチーフとして、デンマザーとして、スカウトと接してきた方々の努力は決してなまやさしいものではないと思います。この努力の継続こそが、今日の四団カブを作りあげた原動力になっていると思います。私もリーダーになってはじめてわかったことですが、努力を継続することほど困難なことはないと思う。この点からいっても、

カブのリーダーに奉仕して下さった人にこそおめでとうといいたい。

さて、私がカブスカウトとして、四団に入ったところのカビングは、今のそれと、私の印象からいって、非常にちがう。どういふ点がちがうか、二つ三つ例を挙げてみると、まずスカウトに非常に個性的な人が多かった。スカウトそれぞれが、皆、何か一つ他の人たちがうもつものを持っていたと思われる。現在のスカウトを見ると、個性が出てくるのは、もっと大きくなってからのようだ。それまでは何か画一化されたパターンしか、それぞれのスカウトから見られないように思われる。第二に団結心のことですが、前は悪い意味の団結心かもしれませんが、リーダーの目をかすめて、組対組のけんかをしたこともありません。今はこのようなけんか一つ見うけられませんが、とにかく、組対抗という意識が非常に薄れてきたことはたしかです。最後にもう一つ、それは男の子らしさです。前に書いたようなけんかもしないことも、その一つのあらわれかもしれません。そうでなくても、私たちがカブのころは毎週のように人民広場（現スウェーデン大使館の敷地）までいって日暮れまでかけまわり、それこそ、怪我だらけになっていました。総じていまのスカウトの方がおとなしく皆いい子になっています。気のついたことをとりとめなく書いてみました。何故このように変わったのでしょうか。私が年をとって古いことが何でもよ



くみえるからかもしれません。昭和元祿とやらで、皆が爛熟した世の風潮にそまってしまうからかもしれません。

スカウトでよく「自然にかえれ」といいますが、スカウティングの一つの要素として、失われつつある原始への郷愁というものがあると思います。ここまで書けばもう自明のことですが、スカウト特にカブはこれからますます必要不可欠なものとなっていくでしょう。四団のこれからの発展は目に見えています。そしてその発展はカブ諸君の双肩にかかっています。

イヤサカ カブ隊 //

## インディアン部落

落合光治

今、夜の九時一日の仕事を終え部屋でテレビ映画を見ている。その時ふっと十年以上も昔の楽しかった思い出が浮んできた。よく思い出されぬが軽井沢で日本ジャンボリーが開催された時の思い出であろう。あの広大な緑一色の高原が「見たす限り」テント一色と化した。その光景がまるで今、見ているインディアン部落の様に思え差詰め我々はインディアと言うところである。その広い会場の端から端に行くのに一時間以上の道程であったから今から考えると如何に広い所で開催されたかと思うのである。何年振りかという暑い日々が続き我々は何日間も入浴をしない為に汗のにおいがしみつき、肌もほこりにまみれていた。

ある日、隊長が隊員を軽井沢湖に泳ぎに連れて行くと言った時のみんなの嬉しそうな顔を今でも思い浮かべる。一時間以上も歩いてやっとのことで辿り着いた湖が永い間、雨が永らく降らずにいた為か他のスカウトが泳いだせいか、真っ黒で、まるでアフリカのカバか象が土沼で水浴するようであった。水あびした後、誰の顔も反対に土だらけになったとは傑作な話であった。あの時ほど風呂が恋しかった事は今までにはなかったと記憶している。又あんまり広い高原には水道が引けず毎日、朝と昼に自衛隊の水槽タンク車が水を運んで来てくれた。その時間になると東京地区の真ん中に高い塔があり、その上に見張りがいてタンク車が来るとラッパを吹き知らせる。我々は水欲しさに水入れとなるものは何にでも水を入れた。本当に水がこんなに大切だと思った事はない、その時は苦しい辛いキャンプであった。でも今は、それが逆に楽しく思えるのは不思議な話である。この様に私には数々のスカウト時代の思い出が一度に整理出来ぬほど沢山ある。その楽しい思い出の数々を一生心の奥深く大事にしまっておきたいと思っている。

元、カブスカウト副長補として活躍された。やさしいお人柄はだれからも親しまれている。



## 幸 福

青年隊 高橋恆久

四月のある日の午後、年少隊からの一通の封書が届きました。それは、十五周年の原稿の依頼でした。月日の経つのは早いものです。六月に十五周年を迎えることを、心からお祝い申し上げます。私が、万石さんのもとで、リーダーとして奉仕ができたのは、ごく短期間でしたが、自分自身で考え続けてきたリーダー活動等が異なるのに驚きながらも、カブ達と一緒に行動を共にできた事に、充分満足しています。その中で、印象に残った事を書き出してみます。

カビングというものは、低い年齢の少年達に、スカウティングに志す、準備を整えさせることだと思えます。しかし、少しのスカウティングで、スカウトの複製を作るといふ意味ではもちろんありません。カブ達を活発に、自分の周りの総てのことに関心をもつように訓練していく。そして、スカウティングには是非必要な、チーム精神の初歩である、オールドウルフやアケイラに従う気持を伸ばしてあげなければなりません。また、スカウティングを成功させるうえで、第一の目標でなければならぬものに『幸福』があります。カブ達は、もともと、幸福にできているのですから、これを保たせることは、そんなに苦

勞はいらないと思いますし、幸福というものは、他の道德感よりも多くの役割を果たすものですから、たとえ、各自の生活が異っていても、大変必要な要素だと痛感しました。カブ隊を幸福にしたいと願うなら、まずリーダー各自が幸福でなければなりません。カブ達は、笑うことが大好きで、一緒に大笑いしたり、ゲームの精神にひたったり、カブ達の満ちあふれる生命力を試したり、感じとろうとしたがるものです。それらをよく見て、プログラムの新鮮な材料として、採り入れたらいかがでしょうか。

自分が思っている事を書いてみました。最後に、

東京第四団独自の伝統を維持し、その伝統を土台に、真に発展し、常に日本のカブスカウトの代表である事に誇りを持ち、現代に即したスカウティングの実行に各自が努力して、より良いスカウトに、良き父親になるように激まし、互いに競い合い、幸福を求めて、『いつも元気で』前進しようではありませんか。

もう一度、十五周年オメデトウノ

カブスカウト大島隊長と同期生。よくいたずらをした仲間一人です。



## あのキャンプ このキャンプ



スカウト生活で一番思い出ふかいものは、なんといってもキャンプのこと。

ホームシフトにかかったり、ベッドから落ちこちたり、ハチにさされたり……。

第一回から昨年の第十五回キャンプまで、当時関係のあったリーダーに、思い出をつづっていたいただきました。



一九五四年八月 志水隊長  
埼玉県秩父

この年の六月正式にカブ隊が発足、夏には少年隊キャンプに月の輪だけが参加、他のカブは一日見学に行きました。

なれない手つきでお米をといだり、工作をしたり、ボーイスカウトと同じように作業をしました。ハイキングに行った河原

で、食器を使わずにパンを作れといわれ、練った粉を棒にまいて焼いたが、外側は真黒こげで、内側は生やけのツイストパンが出来たが、それでもおいしいおいしいと口の囲りを黒くして食べました。この中には現在の大島隊長、柳隊長、日下部隊長の顔もあったようです。



一九五五年七月 杉原隊長  
五日市にある東電の山小屋。三泊四日。

カブとして初めての独立したキャンプがうっそうとした木立ちの中の山小屋で行なわれた。大浜、井上、落合君等デンチーフの活躍でプログラムが進行、夜のリーダー会は近くのおずま屋でガヤ蚊に悩まされながらしました。



一九五六年七月 杉原隊長  
山中野営場で舎営。参加スカウト三十数名。

### 山中舎営の思い出

元デンマザー 大和 節

突然舞い込んだ一通の手紙、四団カブの十五才のペースデイのお知らせ、もう十五才になったのかと感無量です。弟分の一五六団カブは今年で十一才になります。お互いに大きくなりましたね。

と同時に驚いたことには、今から十三年まえの事を思い出せとのこと、これにはほとほと困りました。なぜって、このマザーもあなたたちと共に年をとりましたからね。はてさて困って



ばかりもいられたので、おじりはちまきて、その時の写真をひっぱり出して、ほそぼそとつながっている細い細い糸をたぐっています。切れそうになつたらその頃のカブちゃん助けてくださいね。

昭和三十一年といえば、まだ教会には高塚先生という伝導師がいらっしゃって私共スカウトの為に御一緒してくださいました。今は団委員の遠山の金さん、御父兄の、みめうるわしい、かくしゃくたる万石のおばあちゃま、稲葉くん、鈴木くんのお母様方などが写真に見られます。山中野宮場はその頃はカブの舎営には大変不便で、大きな釜を二コ、その他炊事道具一切を持ちこんだものです。

デンチーフとして四人のボーイのお兄さんが一緒にゆきましたが、二日目の晩だかに○組の室でシクシク泣き声がかきこえます。さて何だったでしょう。誰か水道の蛇口をゆるめたのかな。お腹がいたいのかな。推理を働かせてください。…… さあ

大変ノデンチーフが泣いているんです。どうしたのかなと思つたら：そのころのカブちゃん、今の全学連よりすごいみたい（丁度大学四年位じゃないかな。年頃からいっても） みんなでちっともねないでさわいでばかりいるので悲しくなっちゃったんですって。日大の古田会長にはとてもこのデンチーフはなれないでしょうね。名前？ 今のカブ隊長大島君かな？ それともBSの柳隊長かな。でも一寸そうでもないみたいじゃない？ 今は活躍してないと思うけど、もとの今井町通りの洋装店の小川君というお兄さんでした。今のカブちゃんはもっとおとなしいと思います。ちがった？

山中野宮場に去年行った時思い出したことは十年一昔、玄関先にたつて朝の赤富士をあの時すいこまれそうな気持で眺めたことでした。

やっと、ありありとその頃、その時のことを思い出しました。ずい分螢光燈ですね。

あなた方の頭上には神という道しるべ、その先には遠々とスカウティングという道がつづいています。いつまでも歩くことを続けてくださいね。

大和 節！デンマザー（一九五五～五八年）、現在一五六団カブ隊長をしていらっしゃる。スカウト一家で、大学生をかしらに三人のお子様がおいでとは、とても思えぬ若い元気なおばちゃま。今の四団のリーダーはみんな大和さんにお世話になりました。

4 一九五七年 杉原隊長  
三泊四日 箱根小涌谷 参加スカウト四十数名。

恵明学園の施設であったが、立地条件が素晴らしく、最も恵まれた舎営であった。山あり、川あり、滝まである敷地に家が点在し、組ごとに独立した生活を送った。スカウトのお母様がデンマザー役としてつき、月の輪も別に出来て川崎、道下両君により充実した指導がなされました。この施設は、翌年残念なことに火事で焼けてしまいました。





一九五八年七月 杉原隊長  
三泊四日、日光清滝

この夏の舎営地は宿屋のような家屋で、ちょっと目をはなすととなりの部屋の襖をガラリとあけて他の組をのぞいたり、まとめるのに一苦労でした。

## とんびの歌

元デンマザー 八木千恵子

梅が散って、桜にはまだ早い、そう、桃の花が満開で風が吹くと、黒々とした地面に落ちて何だか物憂い、春の午後でした。向い合ってブランコにのっていた一才半の次男が「あ、あ、あ、あ、あ」とお空を指しますので、見上げますと、とんびが輪をかいて、ゆうゆうと飛んでいるではありませんか。時々、ピーヒョロロと鳴いております。次男は東京と違ってこゝ鎌倉は飛行機がよく通るので興味をもっていたのでしょう。それであれはブランコではなくてとんびだと教えたのですがわかる筈ありません。今度はブランコをゆっくりこぎながら「とべとべとんび 空高く……」と歌ってあげましたら、これでわかったのか黙って空を見上げています。

このとんびの歌は日光キャンプで組長の井上登君が一生懸命教えてくれた歌なのです。

あれはもう十一年も前の事になるでしょうか。日光キャンプはうら若き(そのころは)六人のデンマザー達にとっては初めてのキャンプでした。

残っている二枚の写真によると、私の組では組長の井上登君、

副の中山君、鳥飼君、辻君、高田君等が参加しデンチーフは古矢君でした。皆さん今頃はカッコいい大学生か社会人になっているでしょうが御父兄からは家の子はおねしょをするかもしれないので夜中に一回起して下さい、などと頼まれたのをほろえましく思い出します。

ところでこのとんびの歌はキャンプの間の組歌だったのです。現地に着くとすぐ鳥の名前で組名と組歌、組旗を作るように言われカブ達は「とんび」に決めました。組旗も作りました。組の歌でとんびの歌、さてここで私も困りました。新米デンマザーとして知恵の出どころですが、とんびの歌なんて聞いたこともありません。替歌でも作ろうかと思っていると組長の井上君が「ぼく知っている」と思い出して小さいカブにも実に丁寧に何遍も歌って教えてくれたのでした。この五年生の組長さんをととても頼もしく思ったものでした。

今春四才半になる長男が産まれた時に、四団のカブには生れた時から予約しておかないと入れないとか風の便りに聞きその発展ぶりにびっくり致しました。子供達にとってはますます住みにくくなる東京でございますがこれからの一層の御発展を蔭ながらお祈り申し上げます。

八木千恵子(旧姓佐久間)ーデンマザー一九五八〇五九年、新デンマザーのうち唯一のスカウト経験者で、ガールスカウト、また立教のレンジャーの一員として活躍されました。ポパイのマンガにあるオリブオイルのような細きオサクも、今は三人のお子様ママになろうとしています。ますますやさしく美しい神田の本屋さんの若奥様。





一九五九年七月 杉原隊長  
三泊四日 箱根強羅。参加スカウト四十数名。

カブ五周年の年。その記念として魚のネツカチーフがデザインされました。この年はとくに個性の強いカブが多く、ファイヤーの出し物では杉原隊長は涙を流して笑いころげていました。

## 月光仮面

元デンマザー 西木久美子

箱根キャンプの思い出というところ、昭和三十四年の七月ですからもう十年も前の事になってしまいました。

なつかしいアルバムを見てみると私の娘がのぞき込んできて、「あ、ママがいた」と指さして「ね、ママどうしてあたいなの、どうしてつれていってくれなかったの」と聞きました。

あの頃カブだった人達はもうあの当時のデンマザー達と同じぐらいの年齢になってしまったのですから、ずい分昔の事になってしまいました。ハイキングの写真を見ながら、丘をこえ行こうよーと口ずさんでいると娘が又「ママそのおうた何のおうた」「このおうたはハイキングのおうたよ」。この時のハイキングは私にとってはとてもつらかった事を覚えています。中強羅の舎営場から大涌谷までの約十キロ程度のコースでしたが、いつもですとカブ各々がお弁当をふるしきに包み腰に結んだり、背中にしょって行くのにこの時は、お弁当は一つにまとめりーダーが持って行く事というので、一人二個の大きなおにぎりを八人分しよったのです。強羅はとも坂の多い所で、出発した所から坂道で大涌谷にむかう道も階段の様な登りばかりです。カ

ブ達もフワフワいって歩いています。「デンマザーお水のもいいですか」と聞かれるたびに「今のんだら足がガクガクになってしまっ、上まで登れなくなっ、しまりわよ」と言ったもののまるで自分にいい聞かせている様な感じでした。大涌谷に近づくとつれ温泉の吹き出るもくもくの白い煙が熱く、皆の顔も汗だらけで真赤です。私の背中のリュックは増々重くなって、カブ達から何か聞かれても十分な返事も出来なかつたようでした。目的地に着いて木蔭でのんだ水筒の水のおいしかったこと、大きなおにぎりをかじっているカブ達の顔もすがすがしい顔をしていました。組で一番小さかったベツト的存在の二年生の堀内君は大きい人達より強く、一生懸命歩いていた姿は、今でも目に浮かびます。この頃のテレビ番組で月光仮面というのがはやっていて、この大涌谷で撮影をしたのだそりです。この話を隊長から聞いたカブ達は、自分が月光仮面になったつもりでいい気分になって、家路に着きました。

西木久美子（旧姓新崎）ーデンマザー一九五八〜六四年、団委員六四〜六六年、ミスだったデンマザーもその名の通り二人のかわいらしいお嬢様のママとられる。五人組のデンマザーのうち一番変っていないのは私ヨといいながら、日本舞踊、お茶、スキー等々多芸多趣味でいらっしやいました。





一九六〇年八月十日〜十三日 杉原隊長  
富士見高原

隊付のいうことをきかない月の輪全員が、深夜運動場の片隅に立たされたり、お風呂場が火事になり大騒ぎをしたり話題の多いキャンプでした。カブの健康管理のためにもお母様方の参加が多いに役立ちました。

### 思 い 出

元デンマザー 高島 松子

一番遠くから教会へかよっていた私は、朝早く集合する夏のキャンプの時は、バスや電車の始発のことが心配でした。ある時は近いところに泊めていただいで出発したこともありましたが、私よりずっと早くから起きて御弁当や朝食の用意をし、キャンプに参加する者全員が無事に行事を終えて帰ることが出来るようにと祈り、まだうす暗い外まで送ってくれた母をいつも思い出します。

富士見はかなり遠いキャンプ地で宿舎に着いた時はやれやれと思えました。広い廊下をはさんで左右四畳半のお部屋がずらっと並んでいて各組ともむかいあっている二部屋をあたえられて、キャンプ生活が始まりました。

雨にたたられどおしでしたが、ピクニックの日は降ったり、止んだり、皆レインコートを着たりぬいだりでした。石ころ道を元気に歩いてゆく途中に、白樺の木が沢山生えていてとても美しかったです。お昼は組ごとに集まって、持って来たおにぎりとお茶で一休み。又皆にくばられたおやつのカラメル箱の

中から真珠が出て来て大きわざをした。目的地の広場では全員でゲームをしたり、野球をしたり、かけまわったりした。誰かが「ぼく達の宿舎が見えるよ」と言ったら「どこに、あっ見え見え」といってはるか向こうを指さした。

雨で外へ出られず広間でゲームをしたり、歌をうたったりしたが、ゲーム「おじいさん、おばあさん」では三木谷君が輪から非常な早さでとび出してにげるので皆で大笑いしたこと。別棟のお風呂へゆく途中、夜もだいたい遅くどこかの組が外へたたされてズラリとならんでいたのも、我々も声を小さくしてお風呂の方へかけていったことなど思い出されます。朝早く組ごとにした散歩の時のあの高原のにおいと空気のおいしかったこと。寝むけは一べんにすっ飛んでしまいました。

八月のキャンプは、夏のいろいろの行事のつかれが出ることなど反省が出て、それ以後七月にキャンプを実行している。

あの頃のカブはすっかり大きくなり、今はそれぞれの場で元気にやっていることでしょう。いつのキャンプもリーダーとカブはもちろん、御父兄の方々とも仲よくなれて帰って来る事が出来、素晴らしいことだと思います。

高島松子(旧姓渡辺)ーデンマザー一九五八〜六四年、団  
委員六四年。デンマザーをしていた頃は丸ポチャだった  
のにいつのまにかストラリとした奥様になられる。笑い上戸  
といったら、涙を出してバスタオルがはいるほどです。食べ  
ておしゃべりするのには旧DM共通の趣味でした。





一九六一年七月二十一日〜二十四日 杉原隊長  
秩父ニースホステル。

この年からニースホステルを利用。素晴らしいことばかりでした。秩父湖をのぞむ山腹に建てられた白い鉄筋の宿舎、清潔な設備と恵まれた自然の中でのキャンプでした。

### おばけ屋敷

元デンマザー 里見明子

線路は続くよ どこまでも

野をこえ山こえ はるばると ポッポ

の歌声とはウラハラに、ガタタンゴットン秩父電車にゆられてさあキャンプ地へ——。と、車中で元気にはしゃいでいるスカウトの一人がそっと来て

「デンマザー、あのネ……」

「え？ もうすぐ終点だけどガマン出来ない？」

「ウン」大きくうなづかれて、まあどうしましょう。K君の手をひっぱり次の停車駅長瀬で飛びおり、車掌さんに

「トイレの時間ありますか」ときくと

「ここは単線だから待てませんヨ」

しかたなく二人で皆んなを見送って次の電車まで三十分。こりゃー今度のキャンプは思いやられる、とK君を見るといとも涼しげな顔に思わず笑ってしまふ。

X X

ニースホステルを利用しはじめたのは、このキャンプからだ。出来たての施設で、囲りの環境も申し分なく、それだけ

に楽しいことの多い舎営だった。ビクニククでは今にも落ちるのでは？と思うほどゆれるつり橋を渡ったり、ダム工事ではハッパの響く中を足元の不安定な二瀬ダムを渡ったり……。でも何といってもハイライトは「肝だめし」である。

荒れすさんだ、とはいっても戸もふすまも形をとどめている空家。おばけ屋敷が五百メートル位山道をいったところポツンと建っていた。夜、山犬の遠吠えが聞こえる中を一組ごと行かされる。「おおかみなんか こわくない、こわくないたらこわくない」と歌っているわりには自然に「かたまりになつてきて、手といわず、洋服といわずちぎれるほどぎゅうぎゅうつかまえられる。

家につく。指定の場所をさがして目じるしをおかなければノギーツ。ソロンロ入って真暗やみの中を見つめる……。日頃、おばけなんて平気ヨと大いばりの私も、さすがカベや押入れにかこまれた部屋から部屋に移るのはゾツとした。

「あっ前の組の目じるしがある。ここだ！」の声に皆ホツとし自分の組のおいて帰り道の早かったこと。

結局前の組の人達も、こわさでまちがえた場所においたと聞きおかしいやら何やら。

この日の夜中、二段ベッドの上から落ちた人がいたっけ。今大学一年生の松田副長補たちの月の輪の輪の一人です。床はコンクリートときている。ドスンの音にリーダー青くなってかけつけ泣いている彼をベッドにもどす。ムニヤムニヤムニヤ。翌日「どーお？」ときくと「僕どうかした？」

その日からどの組にもベッドからベッドにロープが張りめぐらされました。

(現在年少隊副長)





一九六二年七月二十一日〜二十四日 杉原隊長  
伊東ユースホステル 参加スカウト四十数名

むかし むかし

元デンマザー 高野 梓

むかし むかしの カブのことですって？  
こりゃ アルバムを ひっぱり出さなくちゃあ おはなしに

ならん。  
あつたッ あつたようッ

むかし むかしの カブの写真。

いろんなことが あつたっけ。

いろんなカブ公が いたっけ。

いろんなキャンプに いったっけ。

小さな 青い制服が あつちからこちから「デンマザー」  
むかし むかしのデンマザーは本当に カブの いいお母さん  
だったかしら。心配になってきちゃった。

キャンプは どこに行っても 楽しかった。

「キャンプまで あと 何マイル 歩いて 歩いて 十マイル」

心がおどって 胸がはずんで 足がボン ポンと 軽くなって  
きてしまう。十マイルって どの位のこと なんてきかれて

えーと えーとで答えたことがあつたっけ。むかし むかしの  
デンマザーは情ない。ウーンと これは 伊東ユースホステル  
の キャンプの時。はじめて家族と はなれてキャンプをする  
カブが 沢山いたっけ。思い出す 思い出す。お天気続きの毎  
日。キラリ光る 朝露の冷たい芝生をふんで 朝礼は清々しく

そしてみんなが眩しかった。さあ それからは大活躍。部屋の  
かざりつけ 掃除 整理 組の名誉がかかるんだもの。友達と  
上手くやっていかなくちゃ。絵をかき 工作をして 手紙も書  
かなくちゃ。おひるねのとき 枕なげをして「そばかす 出し  
てしまいました」なんていったカブもいたっけ。伊東の海まで  
泳ぎにいつて ほら ちゃんと準備体操をしている。海の中に  
ロープをはって「ここまでだよ」とデンチーフが 見張り役。  
「もう おなかやすいて 仕方がないんだよ」感謝のお祈りも  
待ち遠しく バクツバクツ わかる わかる デンマザーも同  
じ。「明日のハイキングは あそこの 山だつてサッろりかの  
窓から見える 所々にハゲのあるこんもり山をながめて みん  
なで ヤッホッ！ 大室山に灯ひともしころ 恐い二段ベッド  
も忘れて カブの夢が 音もない明日に またひきつがれてい  
く。最後の晩は 大きなキャンプ ファイヤーを囲んで 瞳を  
輝やかす。三泊四日 あつという間にすぎて キャンプに行く  
たび カブはカブらしく大きくなっていったっけ。そうか カ  
ブは もう十五才。むかし むかしの デンマザーの アルバ  
ムが 黄色くなってきちゃったのも無理ないこと。

カブ カブ ドン ドン 進め。  
いつも 元気に すすめ。

高野 梓 (旧姓持地) ーデンマザー一九五九〜六四年、八木デンマ  
ザーのあとを受けガールスカウトからデンマザーに入る。野球  
やかけっこはスカウトより得意でした。ミセスになっても  
近くの教会で子供会のお世話をして張切っていらっしやる  
変らぬ昔のモンキーです。



一九六三年七月二十一日～二十四日 群馬県  
 山梨県西郷ユースホステル 参加スカウト五三名。  
 西郷のはとり岩海の中に建てられたユースホステル。

### キャンプを通して

元デンマザー 萩原昌子

デンマザーとして最後のキャンプが西湖だったと思う。一つ一つのキャンプを区別して思い出すのはとてもむづかしい。でも自然に恵まれ、衛生上の専ら、何やらとキャンプにふさわしい所を探した苦勞を思い出している中に、西湖のほとりの白い二階建のユースホステルが浮んで来る。富士山が見えた。湖に迫っている熔岩の平な所を見つけて皆で輪になってした組集会の事も浮んでくる。自然条件の違いが戸外での動きをより変化に豊んだものにし、毎年の個性あるキャンプを作り上げてきたと思う。危険な岩の上を飛び跳ねるスリルは、西湖だから出来たことだった。じっと座って自然に吸いこまれてゆくような快感は大人のそれであって、少年達のそれは身体ごとぶつける疲労感にあるのだろうと思う。けれども朝焼けの富士の雄姿や鐘乳洞の素晴しさや不思議さにはリーダーもスカウトも同じ様に自然の偉大さを感じる共通性があった。

何回かのキャンプを通して、ぞっとする様な恐さは、四日間  
 の生活の中で自分の日頃のものの考え方や、性格的なものが粗  
 という一つの小さな集団を通して浮き彫りされる。あのコワサ。  
 そして大事だと思った事は、スカウトと全く同化し、我を忘れて  
 遊べるフアイトが無意識に湧いて、ある時には客観的にスカ  
 ウトも自分自身も見る事が出来た事。

楽しさや喜びは、追いまくられ通しの一日が無事終って皆が

突入ったその瞬間に感じる安んずる様なものでもあつた、どんな  
 な理屈や外的条件よりもまず自分自身がキャンプを楽しんでいる  
 事から発するもので、つらさや苦勞は喜びの一つの要素だつ  
 たと思う。キャンプでの感謝は感謝する事を学ぶ事だつた。セ  
 ルフサーピスのユースホステルの舎営では、お母様方のご協力  
 なしには成り立たないものだった。そして又、どのキャンプを  
 通しても、お忙しい時間をさいて、キャンプ地をご家族づれで  
 訪問して下さった、今は亡き田中先生の事が想い出される。

私自身はカブのキャンプでそんな事を感じてきたのだけれど、  
 キャンプを計画してきた私達はどんな事を期待していたのだろ  
 うとフト思う。集団生活で養われるものには、測り知れない可  
 能性があるはず、大人達がスカウティングじゃせいぜいこの位  
 だろうと枠をもたない事が、より大きな可能性を育てる助けに  
 なるとも考える。四十年前も前にサイブルはバードの最初の南極  
 探険隊の一人として六十万人のボーイスカウトの中から選ばれ、  
 その期待を見事になしとげミスター南極と呼ばれてその一生を  
 南極のためにささげた(朝日新聞) そうだけれど、今や月探険  
 隊に加わったっていいじゃないか、なんてーキャンプの事から  
 私の夢は広がっていく。

そして、西湖のあの熔岩を一かけら家に持って帰った人達を  
 想い出す。あの石のそばに月の石を並べられるだろうか。

萩原昌子ーデンマザー一九五八～六四年、団委員六四年。  
 身心共にたくましく、たよりのある人。三月までYW  
 CAでグループ指導をしていたが、青少年指導などという  
 より若い人と一緒にあって考えリードしていくタイプ。  
 現在東洋英和にお勤め。





一九六四年八月十二日～十五日 杉原隊長  
志賀高原西発哺ホテル 参加スカウト五四名。

## 初めてのキャンプ

元デンマザー 鈴木徳子

西発哺温泉でのキャンプは、カブの十周年の年でしたから、今から五年前の事になります。あの十周年記念の日に、中世のお姫様？として三角帽子をかぶって四団に初登場した私達旧デンマザー（伊藤、鈴木、増田、渡辺）にとっては、初めてのキャンプでしたのでデンマザーとして体験した三回のキャンプの中では一番印象深く心に残っています。それは単に楽しかったという事以上に、つらかったという点で強烈です。今思い出しても身がピリットひきしまる思いが致します。

発哺キャンプはスカウト数が六組十月の輪二組、成人リーダー十七名という大世帯でした。例年とは異って八月十二日から十五日までの期間でしたが皆元気に参加したものです。朝早く寝ぼけまなこで教会に集まってきたカブちゃん達と一日がかりでバスにゆられ、さらにケイブルに乗り継いで宿についたのはもう夕方だったでしょうか。

そうそう、東館山へのハイキングの日は大変暑い日でした。途中で水を飲むと余計疲れると注意されて、皆犬のようにハアハア息をしながら良くも頑張ったものです。途中でリフトに乗ったお母様方に追いこされ、さすがにベソをかいたりす君達……。それでも頂上まで行って山の涼しい風に当り、すぐ元気を取り戻してゲームをしましたね。さすがスカウトだと思っ

ました。

それから夜の楽しみは営火です。あの時は営火場が遠くてデーチーフとデンマザーに前後を守られて皆が前の人のシャツの端っこを持って神妙に一列になって歩いて行ったのです。杉原隊長の「山の神様」の出現により営火が大変神秘的なものであることを知りました。迷優も続出しましたが、なかでも坂井君の女装には感心しました。彼の演じたデンマザーが大そう心の優しいデンマザーでしたので、カブには「そううつっているのかな」とデンマザー一同胸をなでおろしたものです。夜といえ、発哺はベッドではありませんでしたので、暗がりでも人数を確認するには頭の数を数えるべきだと知恵がついて自分で感心したり、皆の寝相が作り出すアブストラクト芸術を觀賞したりしました。二日目の晩でしたが何気なく数えた頭が一つ多いではありませんか。自分の家とまちがえてお手洗いに起きて一階下へおりて来てしまったのです。何てかわいいのでしょうか。あの時入団したてだったそのスカウトも今ではボーイになったと言う事です。改めて月日の流れの早さを感じている今日この頃です。

鈴木徳子ーデンマザー一九六四～六七。子供が大好きで大学の専攻も児童心理学でした。前代デンマザーとはちがって、女性らしいこまやかな三代目デンマザーの一人です。いつも子供とは縁の切れない生活ななさっていらっしやるとか。





一九六五年七月二十一日〜二十四日 杉原隊長  
山梨県清里美しの森たかね荘

天候に恵まれないキャンプだったせいか、ホームシックにかかったスカウトがチラホラ。

## 八ヶ岳、美しの森

### キャンプの思い出

元デンマザー 渡辺和子

キャンプと言えば、楽しかった事、苦しかった事、いろいろ思い出されます。

私にとってカブキャンプが一番思い出となった場所と言えば第二回目八ヶ岳美しの森へ行った時のことです。

第一回目の志賀高原発鳴温泉の時は、自分自身、まだ未熟のため、何をするにも無我夢中、一日のプログラムにおわれてしまい、スカウト達の消燈後にリーダー会が開かれる時には、精神的にも、肉体的にも、疲れきってしまいました。やはり第二回目ともなると、一回目にくらべてだいぶ精神的に楽にすごすことができました。

美しの森のキャンプは運悪く、天候に恵まれず、野外のプログラムも室内プログラムへと変更され、スカウトの中には『つまらないな』と、窓から外を眺めているうしろ姿を見て、私はやはりキャンプへ来て、外へ出られずに、室内にて組集会をする事は、カブ達にとっては、どんなに期待はずれなものか、先ほど、『つまらないな』と口にしたスカウトの気持がわかります。でも私にとってはこの室内にて組集会が開かれた事に

対して、個々のスカウトのもっている性格や個性を知る事が出来ませんでした。

同時にデンチーフのカブ達の指導には、私自身大いに考えさせられてしまいました。

キャンプに参加し、スカウトの一番楽しみにしている事は、キャンプファイヤーです。そのキャンプファイヤーも第一日目には、残念ながら、食堂で行う事になり、カブ達は残念な顔つきです。でもリーダーの経験を生かしたプログラムは、室内も野外も区別ないキャンプファイヤーが進められたので、カブ達も満足の様でした。次の朝はカブ達の気持が神様に伝えられたように、外は青空です。皆とても楽しそうな顔に、リーダー全員ホットした様子、ピクニックも元氣一杯に出かけ、この一日はまるでカブ達は昨日の気持は、どこへと思うぐらいでした。やはりこの時に私は、指導者によって安全性と健康管理のもとに計画されたプログラムによって、規則正しい生活と野外活動によって、丈夫な強い体を築き上げることに目的があると前杉原隊長の舎宮の目的と意義に示されていた事を思い出されます。

渡辺和子ーデンマザーー一九六四〜六七年、前デンマザーー高島さんの妹さん。土曜の午後はお勤めのあと集会へと休まず直行なさっていました。事務能力というか整理整頓の得意なことでも有名でした。





一九六六年七月二十一日～二十四日 万石隊長  
伊東ユースホステル 参加スカウト三十八名、リーダー

十七名。

長い間隊長をしてらした杉原さんから万石隊長になって初めてのキャンプ。伊東ユースホステルは百名収容の施設で貸切のことは出来ませんでした。近いわりに自然に恵まれた建物でした。

## カブ キャンプ

元デンマザー 伊藤洋子

カブは、七月のカレンダーに入るとキャンプ準備の第一号としてプラネタリウム見学があります。隊ではこの年も二日に出かけ、まだ行ったことのない遠いキャンプ場の静かな夜を想像しながら、星の勉強をしたものです。

小室山のふもとで始まった舎宮。二日目には山ヘスケッチに出かけ高い所から海を眺め、次の日、隊ピクニックでそこまで暑い中を歩いたのが思い出されます。波に見えかくれする風せんに石を投げました。フワフワしてなかなかぶつかりません。激しく岩にぶつかってはかえる波。岩の間にいる貝も取りました。帰り道では追跡ゲーム。自分の組の色を一生懸命探して、あったノ、こっちにもノ、時々他の組のを見つけては残念ノ、この時こそ組長以下力を合わせなければいけません。

キャンプファイヤーでは、きれいに沢山輝やいた本物の星の下で、それに負けないようなすばらしい劇、歌。いくつ歌いましたっけ。

キャンプ中には色々な事があります。お家でみんなやってもらった事も自分でやるのですから、たいへんです。動作が遅かったり、部屋をちらかしたり、忘れ物をしたら組中に迷惑がかかるのですから、がんばりました。

このようにキャンプではやはり自主性が養われるのではないのでしょうか。私共がカブとお話するのは、週に一度しかも二時間余では細かな良い所を見つけ出すのがとても困難な訳ですが、四日間共に行動していると普段のメモと合致して「やっぱり」と思ったり、以外な点を発見して「なるほど」と感心する事もあります。勿論、当座は心に何も残らなかつたと言う人もいます。大きくなって社会にほり出された時、きつとデンチーフ、組長達と一緒にいた巣を思い出してくることでしょう。ながい目で見たいものです。

デンデンデン いつも元気!!!

伊東洋子ーデンマザー一九六四～六七年。芸大でサキソホンの勉強をなさっていました。お蔭で、それまでただドナることが多かったカブちゃんの歌もやっと正統派音楽になりました。

現在母校の玉川聖学院でピアノを教えていらっしやいます。



一九六七年七月二十一日～二十四日 大島隊長

埼玉県秩父ユースホステル。参加スカウト三十五名、

リーダー十一名。

隊長はじめデンマザーその他のリーダーが一新し、準備不足のうちでキャンプが始まった。舎营地は以前にも行ったユースホステルだったが囲りの環境はすっかり変り、ピクニックの秩父湖一周ではハチの大群にみまわれ、逃げ場がなく、皆顔や手足をはらせて返って来た。

## キャンプの反省

元年少隊副長 内藤正樹

プログラムは一日目は舎営内の整理と組集会、二日目は、ピクニック、本隊は秩父湖へ、月の輪は、裏山へそれぞれ別れてピクニックを行なった。三日目は、一日中組集会、これはスカウト一人一人が助けあって、一つの完成した組を作り上げることを目的としたもので、夜、キャンプファイヤーで、各組のチームワークの良さを表現させ、その評価を行なった。四日目は、あとかたづけをして、夕方上野にもどってきた。

今回のキャンプに当たったリーダーは隊長を初め副長補、デンマザーまでもが新任であって、カビンクに対する、認識がたりなかった。そのため、キャンプ中スカウトに指導しなければならぬことを気付かずにより過してしまったこともあって、スカウトがとまどったところが多かったのでないだろうか。またプログラムの面でもピクニックの面でも、リーダー側の準備不足で、ちょっととした、ケガ人を出してしまったことは反省すべ

きことがらであった。また、キャンプ地の選択も十分考えなければならぬ。今回のキャンプ地秩父ユースホステルにおいては、自然にめぐまれていたがユースホステルのペアレントとの話し合いが十分でなかったため、カビンクのプログラムとペアレントの主義とにわずかなずれがあった。これはキャンプに支障をおこした。これも、しっかり交渉しておくべきことだった。夏期キャンプはスカウトが一年間、いろいろな訓練をつんできたものを、実用するときであるから、キャンプを計画するのは、それなりの十分な準備をして、スカウト一人一人がフルに能力を出すことができるように、計画しなければならぬであろう。今回のキャンプは、リーダーの認識と準備との不足がいかにスカウトのためにならないかと、しみじみ感じさせられた。

内藤正樹1年少隊副長一九六七～六八年。現在ローパスカウト隊員。実際のなローバーのまとめ役といえるメイトである。もっとも本人は小使的のソンの立場とボヤクことしきりですが。几帳面な性格とお見受けします。  
青山学院理工学部電気電子工学科在学中。





一九六八年七月二十日〜二十四日 大島隊長

西多摩郡羽村国民宿舎清流荘。参加スカウト三十三名、リーダー十六名。

カブ隊としては一番近い場所で行なった舎営です。多摩川べりの木立ちにあり施設は申し分なかったのですが、暑かったことといったら、夜中に粗の部屋をあげるとムーンツとして息がつまりそうでした。お手伝いにお母様がたくさん来て下さり頼もしいかぎりでした。

### 羽村キャンプ

元デンマザー 田中万里子

羽村キャンプの思い出は、たくさんの緑と野鳥の声。それから真夏の強い日差しをあびてキラキラ輝やく清らかな多摩川の流れ。その流れよりもっと清く光るクリクリ動く目のカブ達。いたずらっこの顔、表彰されてちょっと照れてる顔、工作が上手にできて得意な顔、大嫌いなおかずを目の前にして困った悲しそうな顔、そして二段ベッドの上から床まで落ちてでも決して目を覚さなかった安らかな寝顔のカブ達。

暑い暑い長い道を追跡サインと手紙を頼りにムギワラ帽子と少ない貴重な貴重なお水の入った水筒を肩からさげて、ひたいには玉の汗、まるでアフリカの砂漠にでも行ったようだったピクニック。流した汗とすぐ空になってしまった水筒の中に入っていた水とどちらが多かったでしょうか。それで帰って来た時にスイカのごちそうが待っていた時と、その後作ったリーブプリントのもよう入りのウチワでバタバタあおいだ時の気持は又

格別でしたね。

冷たい流れで元気に泳ぎ、工作で仕上げたばかりのお手製の水鉄砲の出来ばえも上々でリーダーやデンマザーに水を浴びせて喜んでいるカブ達の満足そうな顔、カブという名はオオカミの子ではなくてカッパの子という意味のまちがいではないかと思う程でした。

初めて自分で作ったお料理に舌つづみをうった野外料理。カマドのケムリでいぶされながらジュージュ音のしているアルミホイルをまだかな、まだかなって待っている心配そうな顔。その日はちょうど父兄参観の日で、お父様お母様方にも息子のお料理の腕前をご披露しました。

そして夜にはキャンプファイヤー。暗い林の中かがり火を囲んで、とんだりはねたりスタンツに大ふんとう。林の中にひびく歌の声、やっぱりキャンプって楽しいものですね。

田中万里子ーデンマザー一九六八〜六九年。前団委員長田中先生のお嬢様。カブの男の子って良く知らないから困るワーっていつてましたが、さすがガールスカウトだったためすぐ子供達にわけみました。武蔵野音大に在学していらっしゃるのでピアノはお手のもの、式典ではいつも弾いていただきました。



## 親子どんぶり

——スカウトと御父兄のページ——

五十年後の世界 一体どうなっているでしょうか？

スカウトの奇想天外なゆめ。

それとは反対に御父兄には小学校の思い出を

戦争や自然の中での生活、淡い感情などいろいろです。

御自分の小学校の

頃を思い出し、ま

た未来の世界をゆ

め見てお読み下さ

い。



## ☆カブ現況報告

皆様今日は、四団のカブスカウトです。暑さにも、寒さにも負けず、土曜の午後の集会を待っています。

僕たちは、背の高いカブや低いカブ、少々太りぎみのカブややせっぽちのカブいろいろあわせて二十七名。

デンチーフやお母さんデンマザーと協力して少しでも良い組を作ろうとはりきっています。

いつもニコニコ大島隊長、とてもゆかいな里見副長、カブ大先輩の片岡副長、それにいろいろ特技をもった松田、長谷川、原、丸山副長補などリーダーは全部で七名です。

杉のようにどこまでもまっすぐに、太陽のように明るさと強さを持ち続けて行きたいと思っています。



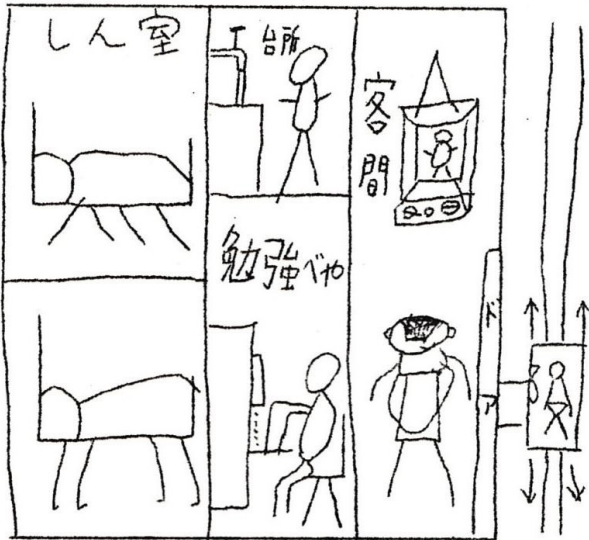
安西武彦

五十年後、エア・カーが走り、ビルも高くなり道路もたくさんでき、田んぼはなくなり、みんなたんばく食料になる。エア・カーも今の車の台数よりふえる。レポートもできるようになる。それで学校におくれなくなる。それにめんきょしようをもっていなくても、エア・カーを運んでんすることをゆるされる。

家族そくカーもでき、自動運んでカーの中であそんで行ける。それに学校では今の「あそび。」を教える。勉強は家ですいみん学習でやる。学校にこないと先生が立体テレビでおこす。そしてばつとして、三十秒で学校にこないとおたれるというのはどうかな？ それにいそいでレポートをわすれますと、くだの中を通る光より速い車にのっていくと五秒ぐらいで行けるのでおこられないですむ。家は一本のぼりにてっばりがある。それが家。下に行くには、もちろんエレベーター

で行く。その家のついたほうはなん本もある。家の中は次のような図案の家である。よくわかりかな？ ぼくの考えたのでは、五十年後、ほんとうにこういう家たちが、車が出て走ることなどになったらどんなにいいだろう。だれでもこのくらいならそうぞうがつくでしようけど、もしもですよ、こんなのができたらどうでしょう。これはみなさんのもんだいにしてぼくの作文をおわります。

(五年生)



父 安西 誠太郎

経験を通じて協調と奉仕を理解するために入隊した子供が、早くもカブ最年長となり、矢章の数も誇らしげな制服姿から、今日の集会の報告を聞く時、父親としての充足感とともに平和社会の恩恵をつくづくと感じる。

私がこの子の年代は、昭和十八年であった。二年前の昭和十六年に小学校は国民学校に改称され、その十二月には真珠湾奇襲に始まる運命の大東亜戦争に突入、翌十七年三月には東京に初の空襲警報が発令されるなど、八紘一宇、国民皆兵、一億火の玉の言葉に代表される暗黒の時代であった。

十八年九月に、上野動物園で空襲時の混乱に備え猛獣が薬殺されたというニュースを、大本営発表の合い間に聞いた時、幼ないながら心の痛むのを覚えたことが忘れられない。

月去り星移って今日、平和を満喫している若い世代が、投石とグバ棒で機動隊とスポーツに興じていることがよいか悪いかを、昭和十八年の精神から子供に教えてやりたいと思う。



## 西家 嗣雄

今から、五十年後というと、文化、交通、政治も大きくかわり、東京全体というよりも、日本全体が今よりも、もっともっと大きくなり、人口が今の東京都の人口よりも多くなるだろう。そして交通は、今まで地面だけしか走っていないのがこんどは地面の道路は、「エスカレーター」・「みたいな、うごく道路だったら、あるかないですぐいけるなあと思います。自動車も、今みたいなコロナ、ブルーバード、セドリック、クラウン、トヨタ、みたいじゃなく、新しい会社ができそこでは、「ジェットエンジンみたいなようなしかけて車ごとうごき、その車には安全よりの機械が付き、飛べるような車。」すなわち「エアカー。」ほくは、一度でもいいからエアカーにのって世界一周し

そのほかに電話が今から八年後には家庭でテレビ電話がはいるから五十年後は

もっともっと、変化すると思います。

もしほくのところにテレビ電話がはいつてきたらもっとその所にいると、すぐわかると思います。

それでいちばんたすかるのは、しょうぼう庁です。でんわをかければげんばのようすがわかり、すぐいかれると思います。

これからもっともっと先になると、五十年後よりもっともっと変化すると思います。

(五年生)

## 父 西家 忠雄

カブの長男と同じ年頃の私の赤坂小学校時代、一ツ木通りの私達の町も両側二十軒位で野球チームが一軍と二軍が編成出来る程友達がいた。通称上の原(現在の首相官邸裏)、鉄砲山(現在の青山場前)、旧鍋島邸の庭、赤坂も子供の遊び場が多かった。多ければ多いなり、猫の額の如き横丁の路地で子供心に色々考えた遊びで又格闘をし、泣かせたり泣かされたり、でも家へ泣きベソや涙はもって帰らなかつた。学校の体操は常に摔倒し身体の小さい私は常に棒の一番根元にしっかりだきついて人間基礎、同僚の斗志のお蔭で負けた事はなかつた。その時以来、人の礎になる事の大切さをつくづくと感じた。

腕白、紅顔の美少年も今は齢四十余年、青春を戦争時代に送り、今日あるは皆様のお蔭と今一生懸命地域社会の方々に職業を通じ又母校のPTA会長として、青少年委員、その他公職を引受けて十指で足らず「いいかげんにしなさいね」と家内から苦情が出ている。



大内真人

せんそりもなく、平和な世界。

父 大内昭剛

五十年後の世界、

五十年後の世界

ぼくはこうなると思う。

ぼくはこうなると思う。

自動車は空も飛ぶ、海ももぐる。

ボタンに 食物の名前が書いてあって、

ボタン一つで、自分の思った所へ行ける。

食べたいボタンをおせば、

前のいすが、後に廻る。

何でも出て来るきかい。

五十年後の世界、

五十年後の世界

ぼくはこうなると思う。

ぼくはこうなると思う。

船はいらない。

年よりは死なないすばらしい薬。

飛行機もいらない。

赤ちゃんがいつでも生まれる、

自動車でいけるから。

ふしぎな薬。

五十年後の世界、

何てすてきな世界だろう！

ぼくはこうなると思う。

(四年生)

月、金星、海王星、冥王星へ、

すぐ行かれるようになると思う。

天体が一つの国だ。

日本、アメリカ、イギリス、フランス、

世界中いっしょになって、

地球国になると思う。

「尋常小学校」が「国民学校」と名を変え、又日支事変が第二次世界大戦へとエスカレートし、物資が徐々に欠乏してゆく、そんな時代だった。しかし子供にとっては、現象は批判するものではなく、全面的に受入れるものであり、休み時間には、「野球」もやれば「軍艦ごっこ」もやり、防空演習があれば、日本製焼夷弾の空罐を競争で集めたりしていた。

「いまの子供は幸福である」又は、逆に「交通戦争の中で不幸である」と言うのは客観的な大人の見方であり、子供にとっては、「カー・クレーン・カラーテレビ」の有無が問題ではなく、あくまで、環境そのものを素直に受入れ、それによって成長してゆくであろう。

当然親子で考え方は異なるが、それは生活する時代・環境の違いによるもので、むしろ現代の子供の方が、より複雑な時代を生きてゆかねばならないであろう。そのためのバック・ボーンを持つことだけは、親の役目であると考えている。



沢村 肇

五十年後というときほくは、六十才にな  
っている。そのころには、学校や遊びに  
行く時にもジェットカーなどのついで  
くようになると思うし、それから自動車  
やバスなどが、たいへんかわってくる  
と思います。

今よりか、スピードがすごくでて、交  
通じこがなくなり、月にも、かんたん  
に行けるようになるだろう。もしかしたら、  
そのころは、せんそうがはじまるかもし  
れない。又はんたいにもっと平和なよ  
い国になるかもしれない。

そのころ、せんそうがはじまると、い  
っべんで国がぜんめつするかもしれない。  
そういうことにならないように、みんな  
の力で、よい国にしてみらいたいとほ  
くは、思う。

それから又、五十年後というとき、ど  
ういう遊びになるのだろう、もしできたら、

ほくは、こうしてみらいたいと思う。

たとえば、野球だったら、今よりかは、  
くふうされて、ぜったいにけがをしない  
ように、グラウンドが、すべりこんでも  
たかないようにできるとか、もっと、  
あたらしいボールができてくるかもしれ  
ない。それからルールが、今よりか、か  
わるかもしれない。

でもほくは、そのとき六十才だ、その  
ときほくは、年をとって、そのとき、  
生れる子は、うらやましいとほくは思う。

(四年生)



母 沢村 市子

九州の宮崎が、丁度「市」になった年  
に私が生まれたそう、名前は、市をと  
って「市子」とつけられ、今だに宮崎市  
と共に年をとっているわけです。小学校  
と言うと五年、六年の思い出が強く、そ  
の時に教わった「日高巖」先生が、上京  
の折によく、私宅へ立寄られ今でも思  
い出話はずみです。とにかく名前の通り  
「巖」ガンとあだ名のある位、きびしい  
先生で、ポーツとしていると全員ムチの  
大きい方でよくたたかれました。又  
授業中にもかかわらず、運動場を三回ま  
わらせ、上からそれを見て居て、ダラダ  
ラ走っている人には、さらに一回二回と  
罰がきます。

五年の夏休みは毎日登校し、バレーボ  
ールの練習です。小学校ではあの頃が始  
まりだと思えます。その甲斐あってか、  
どの学校との試合でも勝った事を未だに  
先生のお蔭だと感謝しております。現在  
の小学校と比べて、数段の違いだとも  
われます。



## 品川 公太郎

五十年たつと、ぼくは、五十八才になります。家の、きんじょの、ようすも、すっかりかわると、思います。木ぞうの家などなくなり、大きなビルが、立ちならび、高そく道ろが、ふえて、小さな家は、なくなるでしょう。いろいろなかつこうの、ビルが、たくさんできるでしょう。

のりものも、空中バスや、じか用ひこりきがとび、ビルの、おくじょうに、はつちやくじょがあつて、朝、ばんは、空の交通ラッシュが来て、今よりも、星が見えにくくなるような気がします。

そのかわりに、うちゆう旅行もできて、外国に行くのも、今の、新かんせんの、旅のようにかんたんになるでしょう。

ぼくは、おとうさんの、あとつぎをして、立ばな、おとなに、なりたいと思

ます。

今は、はたらく人が、なかなか、あつまらなくて、おとうさんも、おかあさんも、夜中の三時ごろまではたらいいていますが、ぼくがしごとを、するころには、いろいろな、きかいが、いっぱいできてそんなに、むりをしなくても、じゃんじやんしごとができる、と思います。

てっきんの家をたてて、おとうさんと、おかあさんと、いっしょに、ひろい、にわのある家に、すむのが、ぼくのゆめで

(三年生)



## 父 品川 慶次郎

北陸の農村に生れた私は、四十年前が丁度今の息子位で、一畑位の分校に通つたものです。春、水がぬるむと小川で魚とりや、山に出かけ、いたどり、わらびなどをとり、梅雨が上ると早速家の裏の川で泳ぎ、冬になれば竹を割つたスキーをはいて、誰に教わるともなく、泳ぎ滑ることが身についた。全く自然そのものの田園生活である。三月の中旬頃と想うが、一年生の入学前に身体検査を受けるため父に連れられ、四畑離れた本校に出かけたことを覚えてゐる。それ以来父兄同伴で学校に行った記憶はない。海軍大将になりたいと夢を持つようになったのは四、五年の頃だと思ふ。勉強なんか考えたこともなかった。それでも五十人中何時も五番以内には入っていたから、んきなものであった。三人で優等を張り合つたのは五年の終り頃である。息子にも、そんな頃までは心身だけを鍛えることで満足したいと思つてゐる。



## 八代 信夫

五十年後には、ぼくは六十才、四団のカブも六十五周年をむかえる。

その時は、空にはSST 陸には、チューブレックス 海には原子力船がはしっているし、宇宙には銀河けい一しゅうロケットバスなんかできるかもしれない。

こんなことを言う人もいるかもしれない。「わたしは、めい王星にべっそうをもっているの。」とか、

「ちょっと、ニューヨークへ、買物に行くのよ。」

なんていう人もあるかもしれないし、またこんなことを言う人もあるかもしれない。

「わたしのハウスの、自家用光子ロケット、二千十九年がたなの。」

なんていう人もいるかもしれない。

それに、世界は一つの国になって、こぼも、同じになり、食べ物も、じょう

さいのような物なので、食事はかんたんにすむ。

学校や、ゆうえん地や、会社へ、行くにもカプセルに、はいつて行き、小がたの、ジェット機で、ドライブに行ったり、自転車の代りに、小がたのエア・カードとか、せなかにつけて飛べる、せおい式ロケットで、人が、空をとびまわる。

もんだいがある、それは、人間のすむ家だ。でも人間が、ほかの所へ、いじゅうすればいいのだ、たとえば、地底都市を作るとか、ほかの星に町を、作ったりして、人間はだんだんしんぼしていくだろう。

このように、いくら科学が発達しても、あらそいごとをしたり、ころしあいをするような世界になってほしくない、それに、人間の心はいくら科学が発達してもやさしいきれいな心でいてほしい、いつまでも。

(五年生)

## 母 八代 珠子

小学校のころの思い出といえば、戦争に関係した事ばかり思い出させられる。

シンガポール陥落のお祝いに、とかで、男の子には、野球のボール、女の子には毬つきのボールが、くじ引きで当る事になり、胸をときめかせたが、女の子のは大きい為か、数が少なく、運悪くはずれて了った時の口惜しかったこと、それからは、コンニャク玉から作ったとかいう水に濡れると、ぬるぬるになって了う毬でしか、遊ぶ事が出来なかったのだから。

楽しみにしていた修学旅行も戦争が激しくなつて来たという理由で、中止になり、日帰りの日光行きになって了った。

この様に、戦争中に送った子供時代だったが、本人は、それなりに結構楽しかった。「欲しがりません 勝つまでは」という標語を、心の柱にして、我慢する目標が持てただけ、却って、今の子供達より幸せだったかも知れない。



鶴田裕史

今から五十年さきは、こういうことになるかもしれない。

ロボットは、サイボーグになったり、道はもっとすぐれてベルトコンベヤーで立っただま進んでいられるかもしれない。車は、空気ではしるエアカーになるかもしれない。ロケットはすぐいってかえってこれるかもしれない。

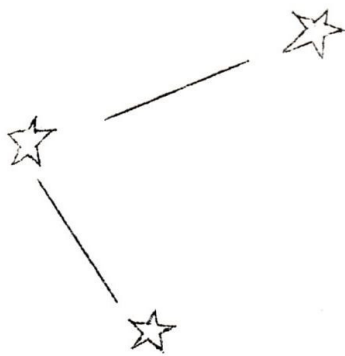
タイムマシンができて、昔やかこに行かれるかもね。けいかんやガードマンのピストルはレーガンにかわって、タイヤのついた車は自動ではしったりする。

二十一世紀には、石油は、航空きねん料など特別のものをのぞいては、ねん料として使われなくなるだろう。

プラスチックも、合成せんいも、その大部分がもともと石油から作られている

が、石油から食料を作るのも、そう遠いしょう来のことではない。

たんぱく質は、石油バクテリアや石油こうぼきんですませることができし、しほりも石油から作られるだろう。石油のパラフィンをさん化させるとしほりさんができ、これでマーガリンを作れば、かちくからしほりをとるひつようはなくなる。



先ず交通事情の違いを取上げただけでも、如何にのびやかなあの頃だったかと思う。以前は左側通行で今の様に右側通行はいけなかったし、自動車も今から想像も出来ない位少なかった。家の近くの青山斎場は殆んど毎日の様に車と人は多く出入りはあったものの、今とは比べものにならない。つい戦後も銀座通りを荷馬車が通っていたと言っても信じる子供はいないと思う。それに二年前まで都電が走っていた事もだんだん過去になってしまっただろう。

小学生の遠足の思い出に桜草一面の浮間ヶ原がある。重い雲に祈る様に出かけたのが、祈りむなしく向うへ行きついたら大粒の雨になって、ばしゃばしゃ濡れながら真黒な木綿の傘が続いた。その中嵐めいて桜草等どっちでもよく、そうそうに引上げ、校庭に傘をさして整列し、校長の例の長々とした訓辞の頃は熱も出んばかりだった。此の前、人を訪ねて行った浮間ヶ原は家が密集して雨けぶる桜草の園は見当らなかつた。



## 鈴木隆太

五十年後、西暦二千四百六十九年、昭和九十四年、僕は六十才のおじいさんで、孫が居る頃だ。

五十年後の世の中は今とどう変わるか。まず最初に考えられる事は、自動車、バス、都電などが全てなくなり、町の乗り物は、全てエアカーを応用した物になるだろう。これは、現在でも研究が進められているので、きっと、実現すると思

う。次に、ロボットや電算機が普及して、人間のする事がなくなり、やがて人間は、考える事を忘れ、地球はロボットか宇宙人などにせいふくされるかもしれない。その話は別として、こんどは家の中の事。まず、台所。料理は、原料（キャベツとか牛肉など）に記号（A19 BC10 など）がついていて、その記号が書いてあるスイッチを押すと、食料コントロールセンターから原料を電送して来て、そ

れを調理器に入れて、料理の名前（ハンバーグ、ハムエッグなど）が書いてあるスイッチを押すと、約十分で出来あがって出てくるようになると思う。

テレビは、もちろん立体テレビで、においも出てくる。階段はエスカレーター、あと、お風呂は、クリーン・ライトというのがある、それに当たると、骨の中まできれいになる。電話は、テレビ電話。気象関係は、町の中に、気象コントロール・タワーがあり、政府が毎日決める気象スイッチを入れれば、雪でも快晴でも、自由自在になる。

最後に、五十年後のカブスカウトはどうなっているか。

国旗けいよりは、モーター仕かけで、時間が来ると自動的にブザーが鳴って、あがり出す。国旗降のうも同じ。ゲームなどはやらす、もっぱら整列訓練だけ。五十年後、僕は、このようになると思

## 母 鈴木 佐和子

私達年代の小学生時代と言えば、全ての想い出は大東亜戦争につながってくるのです。でもつらい淋しかった疎開の間にも懐かしい楽しい一時もありました。

春は防空ズキンをかけての学校のかえり道、川辺のスキャンポをつんだり、白い草の実をかみながら、夕方の空を西の方へ流れて行く大きな風船の様な物を見あげ、きっとアメリカまで飛んで行って爆発すると信じていました。夏は田の草取りです。ヒルにすいつかれて、お友達に草を良くもんで足につけてくれた事、秋のおち穂拾いに行つて「いなご」をつかまえ、それをいってほりほり食べました。冬はたんぼに張った氷の上をわら草履ですべりました。夜になるとお母様に逢いたくて涙が出ましたけれど又朝になれば田舎言葉でとびまわりました。都会をはなれて暮した事のない貴方達に戦争なしでその様な生活をさせてあげたい気もいたします。

(五年生)



渡辺 忠和

五十年後は、エアカーや、ロボットや、レーザーガンや、スーパーカーも子どもたちがつかえるように、なるだろう。

でもぼくたちは、年よりに、なってしまいません。

でもその時には、若がえられるきかいができ、そのうえたぶん死んだ人でも、生きかえられるきかいもできるだろう。

それから、戦争なんかなくなってしまいうだろう。

食べ物、チューブ入りか、たべたいものを、じょうはつさせた玉か、それともまわりのながさが八cmあり、よこが二cmある、とくしゅなゴムの中にはいつている、こながたべものだと思います。

(四年生)



母 渡辺 良子

「よしちゃん、学校さいがねえが。」  
「今いくさけて、ちよっと待っててけらっしえなっすー。」

それは私の小学校四年の頃の、毎朝の行事でした。私達兄弟は、遠く両親の元を離れて、山形県の山奥に、手伝いが一人付き、淋しいお寺の離れに疎開して居りました。夜になると、窓から続くお墓の波が、どんなに恐ろしかった事でしょう。特に、お葬式のある日は、土葬なので、なるべく夜が遅く来ます様にと、真剣になって祈ったものでした。

それにひきかえ、学校生活の楽しかった事、本を読むと、美しい東京べんだと感心され、ピアノをちよっと弾くともう天才児あつかい。宿題をやっっていくと「よしちゃんは大した真面目者だ」と褒められるという、東京では、考えられない事の連続でした。

これで両親がそばにいたら、きつと何も言う事なしの、小学校生活だったと思います。



下平恭吾

五十年後には、ぼくは、もう六十才ちかくなってしまうが、いろいろなくすりで、元気で、若くいられる。

そして、みんな高そうビルや、宇宙都市などに、すんだりしている。

また、車は、エアカーにかわり、それに、じどうそうじゅうで、じこも、すくない。なぜじこが、すくないかというところ、せいこうな、コンピュータを、つかって、いるからです。

そのころは、テレビ電話があるので、へんなかつこうで、でん話に、でられなくなりす。

それに、もう地下てつや、国てつは、はしってなくて、そのかわりに、モノレールやマグネットで、空中にういて、はしるでん車が、そのかわりをします。

そして、子どもは、学校にいかないで、

テレビなどで、べんきょうする。

なまけると、おこられる。

また、かいものにてかけなくとも、テレビでん話で、たのめば、しょう品は、じどうてきに、そのうちの、しょう品とり出し口からでてくる。

もし、このとおりになったら、いつまでも、いきていたいなあ。

(三年生)



兄 下平和夫

私の小学生の思い出は、桜の徽章、面子、見独楽、蟬とり、お祭り、フラフープ、野球帽、安部闘争、プラモデル、大嫌いな音楽担任『もう給食を食べずにすむな』と思った卒業式：等に代表される。低学年時代は都心でもまだまだ土の上で暴れ廻る事が出来、それこそ日が暮れるまで外で遊んでいた。卒業を控えた二年間は私達の生活においても又環境、世相においても著しい変化を示した。母親は競って教育ママと化し来たるべき入試に備え学校も補習授業と称し七時間目までの学習を強制した。いよいよ都会っ子の条件がそろった訳である。その後私は私立校に進学した為再び思う存分体を動かす自然に接する機会を得た。私は都会の子供は自然に接する機会が余りに少ないと思う。その点スカウトは子供に必要な情緒、季節感を養い心身共に健康な人間を造るという意味で大きな役割りを果たしている活動であると思う。



原 純一

五十年たったなら、けいたいよのくる  
まや、ひこうきや、ふねができるだろう。  
それは、ばしょがないからで、のびた  
りちちんだりしてとてもべんりになるだ  
ろう。

みちがこんでいるときは、ポケットか  
らボンとだしてすぐにヘリコプターや、  
ひこうきをつくって、もくてき地にとん  
でいけるようになるだろう。

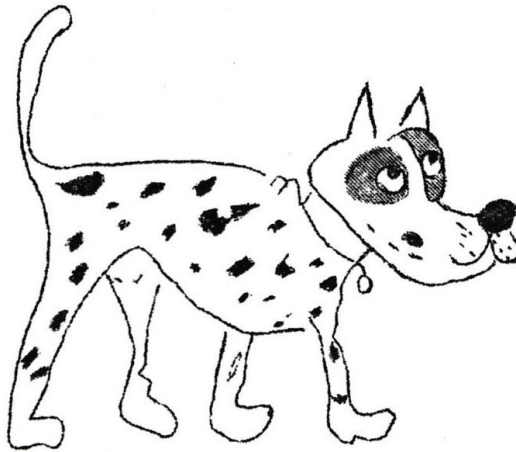
じゅうたくは、月にもできて、子ども  
たちは、お休みになると、ひとりで月に  
あそびにいこうだろう。

そして、ごはんは、ポタンでなにもか  
もできるようになるだろう。

人げんのかわりにロボットが、はたら  
いてくれるだろう。

人げんは、いままでよりもっとあそべ  
る時が多くなるだろう。

五十年後は、かがくがはったつして、  
いままでより、もっとせかいは、たのし  
くなるだろう。



(三年生)

父 原 三 郎

最近「下久保ダム」「庭石の町」とし  
て知られてきた群馬県鬼石町で腕白時代  
を送った四十年前の印象を、ほろにがい  
気持で書いてみましょう。

○うれしかったこと——お盆休みに限  
って、あの赤い色のついたかき氷を食べ  
る事が許されたこと。ま新しい浴衣の肌  
ざわりと、硬い下駄の緒が痛かった。

駄馬に乗せられて春の田舎道をゆらり  
ゆらりと十六キロ。祖父と藤岡の馬市に  
行ったこと。テトテトガタガタゴトゴト  
と定期便の馬車が時折私達とすれ違っ  
て行った。

○かなしかったこと——「この子は震  
災の焼け出されだんべえ」大人達の心な  
い一言が、どんなに深く子供心を傷つけ  
たものかわからない。

全校中たゞ一人学生服を着たために生  
意気といじめられ泣いた時もある。

「次郎物語」の文字を見ただけでも涙  
が浮かぶ五十才の父親の心は複雑です。



尾関弘恭

ぼくが、五十八才になったら、パパやママは、おじいさんや、おばあさんになって、いるね。

でもぼくは、お父さんになって、子供が出来るな。

けっこんだつてとっくに、しているな。

テレビ電話や、カラーテレビなんてこの家でもつかっているな。

エアカーや、うちゅう都市や空中都市もできているな。

サイボーグ人間や、ロボットもどんどん出来るかもしれない。

学校にも、いかになくて、家で勉強ができるように、なったら、きつとむすこにコンピューターをかってあげる。

そして、かいしゃにいかなくても、し

ごとができるようになったらなおさらうれしいしらくだな。

(三年生)



父 尾関勝久

楽しい学芸会の日が来た。当時は物資が豊富でないので、大道具、小道具を作るのに苦労した。でも先生や友達と、使えなくなったものを利用してバックの山や木を作り上げた時はとても嬉しかった。私の組の劇は、正確には覚えていないが戦争もので、私は軍隊の隊長になった。いよいよ出番となり胸をときめかせながら舞台上り、やおら中央にて立ち止まり、胸を張って客席をすいと眺めながら(ちよっと恥かかったが)「腹が減っては戦さが出来ん、さて何時かな」と言いながら紙製の直径十センチ位の大きな時計を左手に掲げて、見た：とたんにウアーという笑い声と共に「時計が反対だ」とヤジがとんだ。一瞬カーツとして何がなんだかわからなかったがよく見たら時計が裏表同じだったのだ。そこでぐっと客席をにらんで時計を裏返しにしたら。それならまたまた、ウアー。私はこの初舞台を時折思い出します。



## 上原栄一

五十年後、それは、西暦二千十九年、昭和九十四年だ。

町には、エアカーが、宇宙には、ロケットが、どんどん、飛ぶ時代だ。

だが、今ではとてもそんなことは、考えられない。

僕は、六十才、まだ生きているだろうか。五十年後変わること。

1. 殺人、自動車事故、強盗などはなくなるだろう。

2. 人間は働かなくなり、ロボットが活躍する時代になるだろう。

3. 人間は、空を飛べるようになるだろう。

僕の考えではこうなるだろうと思う。

だが日本、いや地球はなくなってしまいうだろうか。

僕は、そんなことにはならないだろうと思う。

五十年たっていないと思う所。(長所)

1. 科学が発達して、いろいろな、食物、薬品、などができるだろう。

五十年たつて悪いと思う所。(短所)

1. ロボットが働き人間が働かなくなるだろう。

だが五十年だけで、いままで想像してきたようになるだろうか。

五十年だけで、ロボットが、なんでもするようになるだろうか。

けれど、僕は、このようになるようにいっている。

五十年後まで、生きて、五十年あとの世界をよく見てみたいと思う。

(五年生)

## 父 上原豊三

私が小学生の頃は丁度大東亜戦争の真最中で、伊豆の修善寺温泉に学童疎開をしていました。

昭和二十年東京が空襲をうける頃になると毎日のように敵機が修善寺の上空を飛んで、東京に向かって行くのを眺めながら防空壕の中や林の中に避難したものです。

今、考えると小さいながらも防火訓練をしたりお百姓さんの手伝いをしたりしながら勉強した事がなつかしく想い出されます。

今の小学生は戦争の心配もなく思う存分に勉強したり遊んだり出来て本当に幸せですね。でも昔は修身と言う時間があり礼儀作法など教えられました。今の小学生は少し行儀が悪いと思います。

カブの子供はその点よき先輩に御指導いただき立派な人になり次の世代の指導者になるよう一生懸命がんばって下さい。



伊藤武司

これは、五十年後の未来のことです。未来人の生活は、どのようにかわっているだろう。きっと、科学は今より発達しているだろう。

自動車は、電気で走るようになり、ガソリンはいらなくなる。また、タイヤはなくなって空を飛べるようになり、じこがへる。ほどりが動いて、人間はみんな歩かなくてもいい。食事は、一この豆ぐらいのを食べると、一日もつようになる。水道からは、水の他に、ジュースなどが出て来るので、いつでも、冷たくておいしい飲み物が飲める。家の中にテレビ電話がついていて、家の中と学校の間で、話しながら勉強ができる。テレビは、全部カラーになって、白黒のテレビは五千円で売っている所も出るだろう。せんたくやせうじは、みんなロボットがするよ

うになる。ロボットは、みんな空を飛べるので、おつかいに行くときには、便利だ。人間は、少ししか、働かなくなり、運動しないと体が悪くなるので、家の中に運動する場所を作って、そこで運動したり、体せうじをしたりして、体の調子をととのえていく。そこは、子どもの遊び場にもなる。人間はなまけてばかりいると、体が悪くなり、自分達の作ったロボットにやられてしまうかもしれないし、人間はロボットに仕事をおしつけてばかりいるので、いつロボットが戦争をおこしてくるかもしれない。科学が発達しても、人間は、なまけてはいけない。

(五年生)

母 伊藤綾子

私達の年頃になって、「小学一年生の頃を一寸振り返って見て」なんて聞かれても、あまり速い年月がたってしまったって、十年一昔から計算してもその何倍でしょう。

今の子供たちと、くらべて本当に楽しかった様に思います。

家はこんなに建てこんではいけないし、自動車の数も少ない。又青空はきれいな、夜になると星はよく見える。雨の後の虹はきれいな、

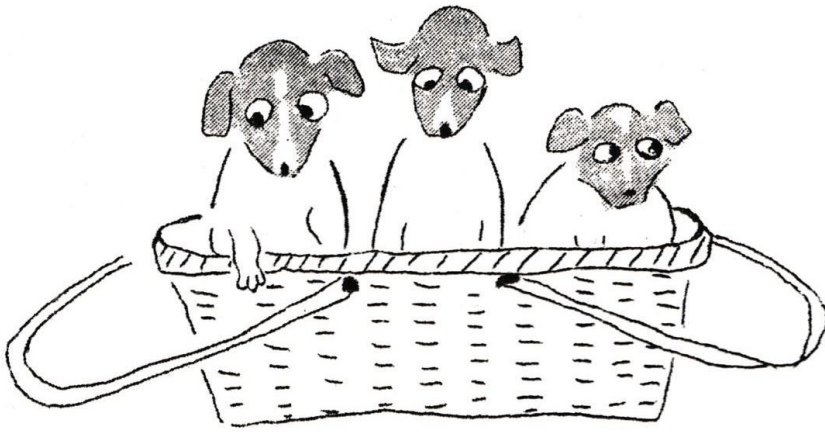
私の家の前に、黒田公爵邸があり、その中で一日中遊べた。テニスコートあり、池あり、築山があつて、おにごっこ、かくれんぼなどには、最適な場所でした。又木の実を拾ってメダルを作ったり、じゆごで首かさりを作ったり、昭和六、七年頃の思い出です。



## 人見 孝

五十年ごには、交通がべんりになり、車のりょうも、少なくなる。それに空りくせんようの自動車ができるのも、ゆめでは、ないだろう。ほくは、プラモデルを作るたびに、そのことを考える。頭の中は、そのせつけい図で、いっぱいになる。まっかなボディに、白いやね、広い大空を、鳥のようにとべたら、なんとすばらしいことだろう。そんな、ゆめを見ているうちに、ほくは、五十年たったら、おじいさんだ。そこで、ほくは、目がさめる。そうだ、五十年ごには、年とらない、クスリができるのも、ふかのうではない、そうになったら、なんと、五十年ごが、まちどおしいだろう。

(四年生)



## 母 人見美津枝

ガタンガタン、列車は動き出した。胸には名前と血液型小さな背には防空頭布せてこれだけは女の子の旅立ちらしくはなやかな母の心づくしの上着とモンペ。窓の外に今にも泣きそうな母に不思議な気がしながら疎開に出発した。忘れもしない十九年八月。虫の声にねむれぬその夜から心の中の不安がだんだん広がって行くのをどうしようもなかった。其後幾週間かたつて母が面会に来た。疎開した時の緑と変って見わたすかぎり黄金の波やせた背にリュックをかけ何度もふりかえりながら遠くにきえて行く母を、私はいつまでも見送った。その母も今は七十才、母の後姿を見る度にあの当時を思い出して胸が痛くなる。「お母様元気で長生きしてネ」私はいつも心の中で祈る。遊ぶ物もなく、食べる物さえ乏しい中で、なんと心のつながりの豊かだった事、ゼいたくになれた現在、子供達のねしずまった長い秋の夜、その時と変らぬ虫の声を聞きながら私は、いつも反省する事になっているのである。



丸山伸吾

親子どんぶり

五十年後はどうなっているだろう。道がなくなつてこうそくどうろだけになつてそらをとぶ車のはしるようになるだろう。金もちの人はうちゅうにべつそらをつくつて夏休みやなんかにあそびにいくなじやないかな。家なんてなくてみんなちようこうそくビルになつてしまふだろう。五十年後には学校がなくなつていれはいいなーとおもう。学校にいかないらくなせいかつをしたい。学校に行かなくやあたまがわるくなる。しんはいむよう、科学がはつたつしたからねているときにみんなあたまにはいっちゃうというわけ。おとなの人は、はたらかないできゅうりようがもらえる。なんでかという国でもらえるのさ。でも、前しゃちようをしたりしていた人はそんだね。きゅうりよ

うがすくなくなるかもしれないから。でもそのてんいいところがある。たとえば前こじきだった人が毎月お金をもらえるし、きゅうりようがすくなかつたりするとおおくなる人もいるからそのてんはとくだね。

でもそんなこといつているけどいきていないとだめだね。しんじまつたら、みらいもなんにもなくなつちやうからね。

(四年生)



父 丸山繁樹

私が息子の年頃は、今から二十八年も前のことです。その頃の東京は現在と違い空は青く、夜は星が一面に輝いていました。私の住んでいた杉並も野原があり、池がありました。日曜日には弁当を持って近くの公園に友達と連立って小高い丘や、田園の中を冒険心を燃やして歩き回ったものです。

今では青空もなく、夜空の星は一等星を見るのがやっとという状態であり、野原や池は姿を消しました。あるのは狭い庭をもつ住宅だけです。自然に親しむには田舎に住むより方法がありません。この様な時代に育つ都会の子供達は、昔に比べてしつとりした温か味という点については欠けているようです。これは一つには自然に触れて育つことが少ないからだと思えます。私達大人は子供たちがうらおいのある大人に育ってもらうために出来るだけ自然に触れる機会を作つてやる努力をし、考えてやらねばならないと思えます。



## 天野邦彦

ぼくは五十年後のみらいは、エアカーが走っていたり、光速とつきゅうが何百人もの人をのせたりして、ぼくはぜんぜんしあわせにならないと思う。なぜなら、

むかしみたいいきょうりゅうやいぼイノシシはいなくなったけど、ダンブカーや、エアカーにひきこられる心配は十分ある。それにけものをとることはなくても、こじきがわんさ、わんさといふからちつともげんしじだいかわっていない。むかし、天のうへいかがころされそうになった時、ころした人の方がよっぽどまともなような気がした。

とにかくどうろは、みんな自どうコンベルトになっていて、一ぶんかんで、大さかへいけるようになるといい。また、アメリカ区とか、デンマーク区とか、日

本区とか、世かいを一つにちきゅうという国になって、そして、ほかの宇宙人といったりきたりして、宇宙という星になればいい。

でも、あまりきかいをつかうと、人間がグータラぼねなしになるから、力ごととはのこしておいたほうがいい。そして、どうぶつえんはおりにどうぶつがいろいろあるのじゃなくて、うちゅうかいぶつがいろいろあるのがいい。とにかく、五十年後はもっとゆめのある方がいいと思った。

(三年生)

## 母 天野 富志子

何か書く様にと言われても唯当惑するばかりで何から書いて良いのか分りません。と申しますのは今から一昔も二昔も前の事ですし生活もまるで違つて居ります。唯小学生も底学年の思い出として今でも鮮明に思い出されるのは、自然に親しむ事が多く、素朴ではありますがおびのびとして居た様に思います。そして戦争が始り物資の欠亡と相次ぐ食料難の中で小学生時代を過した私共は、唯毎日が粗食と質素な生活、何時敵機の空しゅうりに逢うかも知れず不安としょうそうの連続でした。それにくらべ今の子供達は物質面では幸の一語につきますが、反面至る所に危険な事ばかり遊びも思う存分出来な様な有様。文化の発達と共に次の世代をになう今の子供達が成長した時何事にもたえしのぶ力強い精神が欠けるのではないかという不安がなくも御座居ません。其の意味でスカウト活動を通じて子供に取ってはにんたいと修養の場であるように願つて居ります。



### 三谷昌彦

これから、五十年後のスカウトを書きます。

まず、はじめは、せいふくです。ほうしは、日よけ、うちわ、みずくみなどですが、五十年ごは、マークがかいちゅうでんとうで、ほうしのうらにポケットがついていて、だいじなものはいります。つぎは、くつ下です。これは、じだいがかわってきたとおもわれます。じつは、このくつ下は、きせつや、天気によってあたたかさがかわるのです。また、これをのばすと、長いくつ下になります。ふくやズボンも、きせつや、天気によってあたたかさがちがうのです。

次は、おもにやることです。ひこうき

とかふねで、せかい一しゅうをやって、

アメリカとかブラジルの、いろいろなと

ころのじだいのうつりかわりをしらべて

今いる日本とくらべたり、しんぼを話し合ったりしていろいろまとめ、ひとつ

の本のようなものを作ります。また、しんぼもとってはります。また、いろいろな国ののりもので、気にいったものもけいをつくりまます。また、でんちとかモーターで、しかけもつくりまます。こんどは、ついせきサインです。エアカーでやり、ばしよは、うちゅうのほしのちかくでやります。つまり、ほしがひつようなのです。じつは、みんなエアカーのうしろに光を出すところがあり、それでほしをてらすと、じぶんの行く方向へやじるしか、もじがでます。まだいろいろあります。それもみんなながくてきにやり、またエアカー、げんしりよくなどでやることもありますでしょう。

(三年生)

### 母 三谷 八重子

のほほんと過していた小学四、五年当時は、丁度太平洋戦争も破竹の進撃を続け、大本営からの勝利の発表に、神国日本は不滅であると子供心に信じて疑いませんでした。が、小学六年になった昭和十八年には、アツツ島玉砕それに三国同盟の一角であるイタリヤの降伏の報せに不吉な敗戦への凶兆が現われ始め、大人達の不安気な様子に怯えを感じる様になりました。その上名譽の戦死者としてたたえられた英靈の無言の婦国の陰に肉身の深い悲しみの表情をみて小さな胸に納得のいかないものがかすめたことを憶えています。この様な緊迫した情勢の中で、私にも憧れた子がいました。頭が良く、美少年でいつも苛めっ子から守ってくれた勇敢な男の子でした。田舎へ転校の為母親と二人長い影を落して校庭を横切つて去って行く姿を三階の裁縫室の窓からさよならと一人つぶやいたあの幼い淡い感傷を今懐しく思い出しています。



岩崎 浩一

五十年たったら、ぼくは、五十八さいです。

じどう車は、空をとんだり水の上をはしったりします。

でん車は、せんろがなくなって、ロケットしきになります。

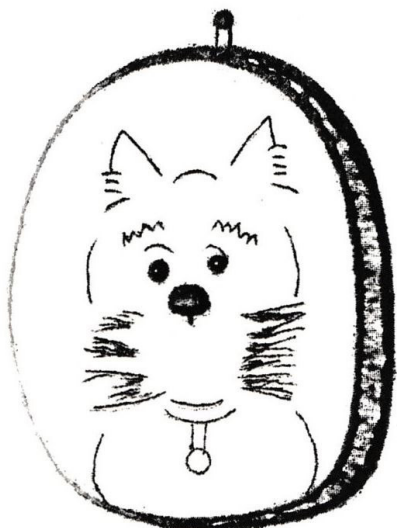
そしてじゆうに月にいくこともできます。

たべものはコンピューターにめいれいをしてつくります。

いえもじゆうにくみたてしきで、なつは海べにいきます。

べんきょうは、ロボットがやってくれます。

(三年生)



父 岩崎 由郎

三十数年前の事故定かでないが、おぼろげながら当時を偲び強烈な印象として残るものは、勉強嫌いで低学年の頃女教師を泣かせた事。私の生家は前が海後は山と自然の美に囲まれた小寒村である。小学校は山の中腹にあって何百段もの石段を踏み踏み通った。登校は苦々しく下校は喜々として言わずも知れた腕白小僧の典型である。四季の変化は此の上もなく、子供心の遊戯心をそそる、春は花、夏の海、秋は魚、冬は鳥或る時は海に小舟を出し、一尺ものボラ魚を釣り上げるそのスリルとも言うべき一脈我天下を取ったりの感、子供心の優越感又それは自分自身の特技とも思えた。漠然としてつかみ処のないものであるが、我々の子供時代と現時点とが余りにもかけ離れ、子供心の焦点が何であるかをうたがい悲しく思うが、果してそれが親心であるるか、いやそれとも子供は無心の境一日を満喫しているであろう。将来の幸多かる事を切に望む。



中根秀樹

五十年とは、ぼくは、六十才。六十才は、今とても働らきざかりだ。だからいっばい働らく。そしてぼくには、建ちくかのおじがいる。ぼくは、その仕事をし、五十年このビルはぜんぶぼくがたてる。そして今までにない二百階だてのビルを建てていちばん上に大きい食堂を作り、一年間に何千万円でもうかりたい。そして屋上には、子供やおとなの遊べる遊園地を作る。

そして全部乗物は、ただでのせる。そして地下は、全部ショッピングセンターにしてまだ世界でいちどもうりだしたことの無い品物をうってもうけたい。学校などは、てっきんコンクリートのすごいのを建てたい。自分自身の家は、みんなさいていが五階だて、あとは、みんな十階だてや二十階建の家で屋上には、みんな

なスペースカーや、ヘリポートのひ行場がある家を作る。そのヘリポートは、みんな自家用車で、どこでも行きたいところは、それで行くから今迄のより、とても便利だ。だから、それがよく利用される飛行場は、なくなる。そのわけは、かく家に飛行場があるからだ。そして電車などは、なくならない。でも電車は、とても早くマッハ二ぐらいでる電車がでてくるかもしれない。だから五十年とは、とても、すごい国になるといいと思う。

(五年生)

母 中根充子

今更乍ら走馬燈の如く過ぎ去った昔の日々を思い浮かべ、只懐かしく昨日の様な気が致して参ります。

平凡な毎日を過ごして来た私にとって、さてとなるとあまりにも遠くなりにけりという感がひとしおでございます。

ゴム縄遊び、道路一杯にゴムを張り、毎日少しづつ上達し、背丈以上にはね上がり、大喜びした事、かくれんぼ、かけっこ、自由に道路をはね廻り、良く遊んだそれらの事が、なつかしく思い出されて来ます。学童疎開もなく、自然の環境の中に育くまれる事なく、都会より一歩も外に出ず暮した現在あの時何処でも良いから、田舎と言う所で一度暮してみたいかと思っている今日此の頃でございます。上級に行くにしがたがたならぬ戦争と言う悲劇に巻き込まれ、質素に、物を大切にと言う教育を受けた私は、現在のスカウト活動に勇気づけられております。



## 西尾 誠

今から、五十年もさきになると、人が自由に空を飛んだり、地下にもぐって、あるいたりできるかもしれない。

それをぼくが発明してゆう名な人になりたいと思う。

今は、

「むかしって、人力車や、かごを使って、走っていたんだね。」

といえるのに、こんどは、

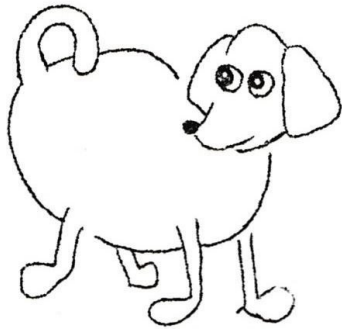
「むかしって、カラーテレビやステレオがあったり自動車があったりしたそうだね。」

といわれるようになるかもしれない。

それとか、今は、おとうさんや、おかあさんに、勉強を、おそわったりしているけれど、こんどは、ぼくたちがおしえるようになるかもしれないな、と思う。

そして、すまいから、洋服からみんなかわっているかもしれないし、交通事ともなくなっているかもしれない。そうすれば、今より、もっともつと、安せんで、明かるい生活になるかもしれない。

(五年生)



## 父 西尾 博夫

私が生れ育ったのは赤坂のTBSの近くである。TBSの所は元近歩<sup>きんぽ</sup>三といわれた所謂兵隊屋敷であった。だから朝夕にラッパの音が聞こえ、風のぐあいによつては隊内の号令さえ流れてくることもあった。少年時代の私は家の前を隊伍を整えて通る軍隊というものを、憧れと同時に近づき難い大人の世界への漠然とした怖れとが混った複雑な気持ちで見つめていた。「憧れ」は、人間が一つの規律の下に行動する美しさに対するものか、又は隊列から一きわ高く馬上ゆたかにかっ歩する将校に対するものであるか、はつきりしない。「怖れ」とは、あまりに兵隊を人間扱いしない「組織」に対する驚怖であったと思う。

近頃の若い者には、規律の下に行動する機会が極めて少ない。そうかといって人間無視の軍隊復活も御免だ。

だから「理解の上に立った美しい規律」。これが近頃の青少年に最も体験させたい環境であると私は常々思っている。



前川喜之

親子どんぶり

みらいは、エアカーと、ぼくのかんが  
えたスチールでんしゃがあつて、ふねは  
ない。海をわたる時はエアカーで行く。  
それもエアカーで行く。でんしゃはまる  
いつつの中ではしる。さいこうじそくは  
マツハ十五、八。はたけはみんなコンピ  
ューターがやってくれる。にもつはロボ  
ットがやってくれる。ゆうびんきょくは  
人間がやる。かいていにもぐる時はム  
ンタイヤというものでかいていについて、  
かいていであそんだり、じどうそうじゅ  
うにきりかえて、ねることができ。う  
ちゅうへいくときは、ロケットをすこし  
かいぞうした、ワーク1.2.3.4.5号でい  
く。このロケットは四百三十人のりで、  
マツハ二百でとばす。

で、くる時はやっぱりエアカーでくる。  
いちいちしゅうごうでかけたりするのは、  
めんどくさいからくつは、カブやボーイ  
しかつかわないうとくべつなくつで、く  
きのちからでういて前やうしろなどじゅ  
うじざいとびまわれる。カブのやるこ  
とは、スポーツにかんけいあるものはぜ  
んぶやる。ボーイは、スポーツのびょう  
をはかる。みんな三十びょういらないにや  
らなくてはしっかくだ。

こんどは月のことになる。月はちきゅ  
うみたいにくうきがあつてとてもうつく  
しい。みんな、かく家に月に、いえがた  
てである。いくときは、ワーク号でいく  
のりものは、いっさいない。みんなはあ  
るいてどこへでもいっていい。どうぶ  
つもいる。月はくらのので、ながさ一km  
のけいこうとうを、五百mおきにおいて  
ある。くうきがにげるとこまるので、で  
んじばりあでふせぐ。ぼくは、かがくし  
やになつてみんなにきょうりよくして、  
やくだちたい。

(四年生)

母 前川博子

しわぶき一つ聞えぬ静けさの中で卒業  
生一人一人の名が呼ばれて行ったあの日  
も、二十数年前の昔の事になってしまっ  
た。北国で生まれ育った私は、小学生の  
頃を想い起こす時、戦争中の物資不足な  
どのいやな想い出もさる事乍ら、それよ  
りも土の香り草いきれで一杯の中で過し  
た日々を想い出す。此の辺でも時たま昔  
日をほろふつさせる様にたんぼぼの群が  
り咲く処もないではないが、大抵園い  
がり中に入るべからずだったりしてがっ  
かりしてしまふ。今の子供達は可哀想で  
ある。野球のボールを思う存分かつとば  
せるだけの空地もなく、欲しがっている  
自転車も恐ろしくて買ってやれない。昔  
はテレビもなく、マイカーもなかった。  
学校は木造ノ だけど土の香りと太陽の  
輝きとが溢れ原っぱには子供達が集まり  
叫び声をあげていた。塾通いに明け暮れ  
する現代の子に出来る事ならそれらを取  
り戻してあげたい。これは再び叶えられ  
る事もないであろう私の夢である。



## 町島栄治

ぼくは、五十年後には、車やでん車が、とおらなくなるとおもいます。車は、エアカーにかわるとおもいます。そしてでん車も、なくなるでしょう。

空中のりものは、エアカー、ジェット機、地上は、スクーターやエアカーのくらいでしょう。それから地下は地下鉄です。宇宙はロケット。ロケットで、宇宙りょこうもすこしできるでしょう。

人間の人口が多くなって、土地や、しよくりようがすくなくなっていくと、しよくりようを作るのにたいへんでしょう。しよくりようをつくる人がいまより、何百人もおおくなければたいへんです。

しぜんのところもだんだんへっていくとぼくと思います。どうしてかというとう、いえやビルが少なくなっていくえやビルをたてるからです。

かいていも、ちがってくるとおもいま

す。かいていトンネルのなかに、れっ車

やエアカーがはしるとおもいます。その

外に、かいていをはしるバスやスクータ

ーがはしるでしょう。かいていの人間の

家もたぶんできるとぼくはおもいます。

くうきは、パイプで地上からくうきをと

ってそして、パイプの中をとっていえ

の中にはいるようになるとおもいます。

うみの中をアクアラングをつけてさん

ぼしたり、できるとおもいます。そしてう

みの中もにぎやかになるとおもいます。

今は、わからない円ばんのなぞやいろ

いろななぞもすこしはわかってくるとお

もいます。

ロボットやいろいろなきかいてもたくさ

んでできるでしょう。

五十年後は、うちゅう、地上、かいて

いのようすがいまよりだいぶわかるでし

よう。

(四年生)

## 母町島節子

私共が小さい頃は年令と時代の差で色々違つた面があるでしょうが、何しろのんびりとした自然の中での日常でした。現代の子供と比較して見る時どちらが人間らしい子供時代を送つたかと思うと、やはり文化製品に恵まれなかつた頃の時代がより素晴らしかつた様な気がいたします。スケートリンクが無くても結構工夫をして滑りましたし、竹馬なども竹の木を切つて作りました。又女らしさに戻つた時はとおもろこしの毛と皮を利用して近くのおばさんが奇麗なお人形を作つて教えて下さいました。又母の縫物のかたわらではし布を貰つては人形の長袖の着物や襦袢を作つてお友達同志で見せ合つては楽しみながら遊んだものでした。そして、れんげ草や、たんぼぼ、のびるや、せりと色々摘み草をして思う存分きれいな空気と青空のもとで過ごした事のみ懐かしく平和な小学生時代を述べてみました。



八代孝夫

五十年ごには、海の中に人家や海でい  
ゲームじょうや海でいきゅうじょうがあ  
り、せんすいかんのえきもある海でいと  
しができるだろう。

そして地ていとしてもきて、地ていは  
くらいから、人工たいようがあり、前に  
あなをほるきかいがついている。車で地  
ていたんけんができるだろう。

ちよう音そくひこうきのコンコルドは、  
もうめずらしくなくなって、それより早  
いひこうきができる。

うちゅうりょこうも、ちかくにいぐみ  
たいに、かんたんに、いくことができる。

月や火せいにも、公えんのように、あ  
そぶ所もあって、うちゅうロケットやう  
ちゅう船のえきも、アパートも、いろい  
ろなみせができて、たいようけいのそと  
にもかんたんにでることができるよう

なると思う。

カブのピクニックも、バスピクニック  
ではなくて、うちゅう船ピクニックとか、  
ロケットピクニックとかいわれるよう  
なり、たいようけいの、外へとんでいっ  
て、ゲームを、したりして、たのしくあ  
そんで、かえってこれるようになる。

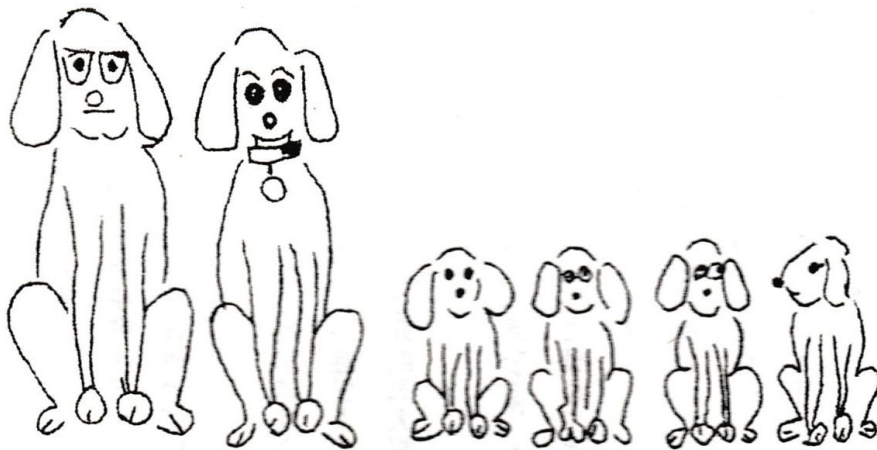
車のうんてんも、人間がするのではな  
く、車がいぜんにしてくれるようになっ  
て、ねむったり、あそんだりしているう  
ちに、もくてき地につくことも、あるだ  
ろう。

子どもは、べんきょうしなくても、あ  
そんでるうちに、べんきょうしたように、  
あたまがよくなるし、しごともしないう  
ちに、お金やたべものや、あそびどうぐ  
などが、とんでくる。

(三年生)

49 ページをごらんください。

母 八代珠子





赤倉瑞穂

五十年ごのとし

ぼく五十八さい、まごがいるかいな  
か

父九十五さい生きていないかいな  
母八十八さい生きていないかいな

あね六十四さいおばあさん まごがい  
る

あね六十一さいおばあさん まごがい  
る

いもうと五十三さいおばあさん まごが  
いる

五十年のあいだにせんそうがあるかない  
か。

あればちきゆうに人は、生きていない。  
なければ日本はせかい一だ。

人間は、原子力でせいかつし、あそんで  
くらせるだろうか。月のほか、うちゆう  
をじゆうにロケットでとびまわることが

できるだろう。

ぼくは、五十年ごには、金もちになり  
たい。

海に舟をだしてさかなをつつて、さし  
みにしてたべたい。

アフリカに行って小ざるをつかまえて日  
本でかいたい。

ほっきよくへ行ってペンギンをつかまえ  
て日本でかいたい。

コックかめしつかいをやとつて、すきな  
ものをつくらせてたべたい。

(三年生)

父 赤倉一穂

小学校には昭和七年四月広島県忠海町  
で入り三年の春、広島市大手町小学校に  
転校し、国泰寺教会に毎日曜日通ってい  
た。

太田の清流、官島の紅葉等遊ぶには全  
く環境に恵まれていたのでよく遊びよく  
遊べと釣りや山登りに思う存分餓鬼大将  
振りを発揮していました。

私に洗礼を受けさせた母は病気がちだった  
ので釣って帰った小魚を焼いて呉れては  
骨まで食べさせられたものです。

六年生の秋、母は亡くなり淋しい思い  
を讀書にまぎらわせていたが広島一中へ  
の受験勉強で段々遊べなくなつて了つた。  
教会にも行かなくなり時折ラッパを吹い  
ていた。兵隊の軍靴の音が益々激しくな  
つてきた。忠海の大久能島では毒ガスを  
作っているという話だった。

小学校卒業の年は昭和十二年である。戦  
争はつい真くそこ迄迫つて来ていたのであつた。



## 久保義男

## 親子どんぶり

五十年ごになると、日本は、みんなろぼとがやってくれて、人はみんな、のんびりできるように、なると思います。くるまは、たいやがなくなり、うしろから、ひがふいて、くうちゅうにあがって、うごいたら、べんりだとおもいます。子どもが、べんきようがいやになつたら、白いロボットをだして、はなをおしたり、じぶんにかわり、ロボットがべんきようしてくれるように、なるとおもいます。

でんしゃがとるそうです。人間は、あたまだけつかい、ちからしごとや、ほかのあたまをつかわないしごとは、ロボットがやります。たべものも、かがくてきにつくった、えいようがあるたべものを、たべて人はいきていくようになります。ひこうきはなくなり、みんなジェットきになり、人間は千人ものれ、アメリカまで六時間くらいでいけるようになります、じかようジェットきになるとおもいます。すむところは、アパートの百ばいもある、大きなたてものにすみす。ビルディングは、百かいだてのものが、ほとんどになります。道は、人どおりのおおいえきや、しょうてんがいに、うごく道ができます。ちいさを川は、ちかにして、その上はどうろになります。

(三年生)

## 母 久保 安

小学校四年生になった頃から戦争が激しくなったので、両親と別れて、友達と軽井沢の山荘へ行った。はたから見れば淋しくて可哀想だと思われるだろうが、私の性格からか、毎日楽しくて、淋しいと思つた事がなく、想い出と言えば、学校から浅間山へ登つた時、途中で噴火に出会い、友達と手をつなぎあって、命から逃げ出した事とか、冬の寒い朝、学校から農家のお手伝いに、麦ふみに行き、わら草履になり、足が冷たかつたという記憶がある。



## 50年後

一組デンチーフ  
龍 忍

五十年後、ほくは、六十三才のおじいさん、五十年後の未来は、科学も発達し、人類は科学の発達で体もつかわなくなり、体がおとろえて、

もやしのようになる。そこで、ボーイスカウトが役に立つ。原始的といっているが、森林の中でキャンプをし、体をきたえる。じょうぶで、よい体になる。ところで、話はかわる。今の霊南坂教会は、そのままの形でのこっていてほしいものだ。もし、まわりの建物が科学の流れで、とてもよい建物となるが、霊南坂教会の伝統だけは続いてほしいものだ。そして、ボーイスカウト日本連盟の第四団の伝統も続いていくにちがいない。ほくも、六十三才より長生きして、ほ

くが死んだのちも、続いて、今のカブスカウトの諸君ががんばってほくたち、みんなの後をりっぱについでほしいものだ。なんだかわけの、わからない、作文になっちゃってしまってたが、とにかく、霊南坂教会と、今のカブスカウトの諸君が、いつまでも、りっぱに、生きていてほしい。

二組デンチーフ

杉田英彰

今年は一九六九年である。今から、五十年後には、どんなことになっっているかは、わからない。でも、今から五十年後という、今この現代月まで人間が、とぼろというのだから、人類は、きつと宇宙にすむようになっているだろう。そのころには、きつとほくらの四団は、世界じゅう、もしかしたら宇宙までも、名のしれた団になっていることであろう。そして、ほくらの四団もいまよりずっと

よくなって、すばらしい団になっているだろう。

でも、そのころには、隊長や副長などは、いい、おじいさん、おばあさんになっちゃってしまいうだろう。ほくだって、おなじようなことだろう。だから、いまのうちに、やりたいことをおもいっきりやって、いろいろと学んだことを、しっかりおぼえておかなければならない。

今五十年後には、どうなるかと、きかれても、はっきりどうと言うことは、できないだろう。もしも、いまから、五十年前の人に、五十年後は、どうなるかと聞いても、同じようなことを言うだけであろう。

つまり、人類は、それだけ、いろいろなことを考えて、実行してきたのである。だから、これからは、ほくたちが考え、実行していくのであるから、五十年後と一口にいっても、おもいもよらないことがおきたりするであろう。だから、五十年後は、どうなっているか、わからないでしょう。



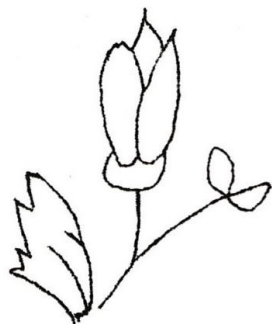






ブラウニー  
尾関 由紀子

五十年たったたら、日本はどんなになっ  
ているでしょうか。でも、今私は九才。  
五十年たつと五十九才。五十九才になっ  
た時のことです。きつと月、火星、きん  
星にべつそうなどが、できるでしょう。  
家に一つずつ人口太ようができて、いつ  
でも太ようを上げたり下げたりできるよ  
うになるでしょう。地下にもすめるよう  
になり、家がたくさんたてられるでしょ  
う。そして、サイボーグができるように  
なり、人げんは、いつまでも、生きれる



ようになるでしょう。そして、タイムマ  
シンも作れるようになり、みらいとかこ  
を行ききできるようになるでしょう。タ  
イムマシンなんて、一どでいいから、のっ  
てみたいと思います。そしてきょうりゆ  
うやげんし人など見たらおもしろいと思  
います。でも、五十年ごは、私が、くう  
そうしたことのほか、まだいろいろな  
ことがあると思います。だから、おばあ  
さんになるのは、いやだけれど早く五十  
年たつといいな、と思います。

ブラウニー

秋 永晴子

今から、五十年後のことを、考えてみ  
ましょう。

おかあさんが、およめに来た時（今か  
ら十六年まえまで）は、せんたくきも、  
電気がまも、そうじきもなかったそうで  
す。それが今では、そうじき、コンピュ  
ーター、月へのロケット、その三ばい以  
上の五十年後という、私は五十九才の  
おばあさんです。さあどんなになってい  
るか、そうぞうしてみましよう。そのこ  
ろは電気どころじゃなくて、テレバシー  
で話をしたり、ロボットができて、うち  
ゅうしよくをまほうで作ってくれます。  
人間は空をとべて、のり物は道をとお  
る。せんたく物をきかいに入れるだけで、  
あらってたたむまで、全部そのきかいが  
やってくれます。顔をあらうきかいや、二







ここは今のカブリーダーのページです。



好きなもの

副長 里見明子

私の好きなものは、空と海。

小さい頃、赤坂にもたくさん原っぱがあった。放課後お友達と草の上に寝ころんで、ぼっかり雲のうかんだ青い空を眺めたあの頃――。

雨の日、リーダーの誰かさんがいついた、

「こんな日はボクいじけちゃうんだ」  
青い空もたまには休日がほしいのじゃないかしらネ。

「地球は青かった」という宇宙飛行士のことばに単純に感激し、あー見て見たい地球の青さを、と本気で考える。

雪山で見た紺べきの空、キャンプ場で見た夕焼けの空。あの空、この空、空の思ひ出はつきない。

スカウトの作文「五十年後」を見ながら、一緒になってはてしない宇宙の夢を空に描きました。

思うこと

副長 片岡 孝

僕のスカウト歴は小学三年でカブに入隊した時にはじまりもう十三年目に入ってしまった。苦しい時もあり楽しい時もあったが、今では全て良い思い出である。

リーダーをやるようになってから研修会、円卓会等に出席して他団のリーダーと知り合いになり、いろいろとスカウト運動について議論する機会を得た。他人の意見を聞いてみるとあまりにも自分の無力さにびっくりするほどである。

歴代のリーダーを見るとすぐわかるようにリーダーは苦勞が多く髪がうすくなる(こりゃ失礼)人が多いようだ。僕ももっかその問題にぶつかって悩んでいる所なのだ。どうしよう……。でもこじきにハゲた者がいないと言うから安心だ。

十五周年を迎えるカブは今、曲り角にきているようだ。古い伝統を受け継いでいるだけに、それからの脱皮と前進がむずかしい現状にあると思う。

微力ではあるが一生懸命はげんでいこうと思う。

カブスカウト

副長補 丸山和子

春

やー今日はノ 新らしいカブの仲間  
調子はどうだね

少し位風が吹いていたって  
おもいきりうでを伸ばそうよ  
ほら、袖の中に手があるよ

夏

やー今日はノ いやいよキャンプ

忘れものはないかね  
少し位暑くたって

元気を出して進もうよ

ほら、リュックが歩いているみたいだよ

秋

やー今日はノ クマさんたち

ポイイスカウトになるんだね  
少し位さみしくたって

がんばろう みんな仲間

ほら 手をたいて送っているよ

冬

やー今日は、どこも銀世界



おもちをたくさん食べたかね  
少し位寒くたって

風を吹きとばして走ろうよ

ほら、どこかで雪合戦をやってるよ

前 進

副長補 長谷川 泉

今年で十五周年を迎えるカプスカウト  
過去から現在へひきつがれ、更に未来  
へと受け継がれてゆく中で、元気にひび  
くスカウトの声、明かるい笑い、それは  
どの時代にあっても欠くことのできない  
ものです。

そして人間は強くなくてはなりません。  
その昔、ある宇宙飛行士は言いました。  
「火は強い、水は火よりも強い、土は  
水よりも強い、だが人間は何よりも強い  
んだ」と。何よりも、そこに少しの疑問  
を感じないでもありません。

カプスカウトはこれからも前進するで  
しょう。くもりな良心と少年らしさを  
失わずに、新たな気持で踏みだしたい  
ものです。

デンマザー第一日

副長補 原 真知子

昭和四十三年六月八日、土曜日。これ  
は私がデンマザーとして始めて集会に出  
席した日です。各組毎に青山墓地まで行  
き、ゲームをしました。道中チョコチ  
ヨコ飛び出すので、緊張しきってしま  
いました。

青山墓地ではデンマザーも加わり二組  
に分かれ「旗さがし」をしました。ま  
だ組員の名前をやっと覚えた位で、誰が  
誰だかさっぱりわからず、逃げまわっ  
ていました。何よりも頭に残っている事  
は、蚊の大軍に悩まされた事——ほんの  
少しの間動かないでいると大きな蚊、十  
匹位にさされてしまい、周囲にも黒い小  
さなものが、我が栄養豊かな体をさそう  
と飛んでいました。

この日は講習会のため、最後まで見る  
ことができずしてしたが、楽しい第一  
日目でした。敬礼をするのが何となく恥  
ずかしく、くすぐったいような気持を覚  
えています。

△おはなし▽

副長補 松田武明

ある日の午後のことでした。混雑した  
大通りを一人の男が手にいっぱい荷物  
を持って走っていました。何か急ぎの用  
でもあるんでしょうか。あまり急いでい  
たので何か落としたようです。でもその  
男はそれに気づかずにとんどんかけて行  
ってしまいました。その時一人の少年が  
落ちた荷物を拾って男の後を追いかけて  
行きました。少年は一生懸命に走りま  
した。——しばらくして少年はもどって来  
ました。手にはまださっきの荷物を持っ  
ています。きつとあまり混雑していたの  
で落とす主を見失ったのでしょう。少年  
はとてまかなしそうでした。でも見まし  
た。その少年の目がとてもすんでいたの  
を。そしてりりしい顔付きをしていたの  
を。「りりしい」——十五回目のお誕生  
日を迎えたカプのみなさん。この意味  
がわかりますか。もしわからなかったら  
それでもいいんです。覚える必要なんか  
ないんです。ただそういう人になってほ  
しいんです。それで十分です。いつも元気！！

## 年少隊活動報告（昭和39年～44年）

○昭和38年以前は、10周年記念誌をごらん下さい。

### 昭和39年

- |         |                    |
|---------|--------------------|
| 1.      | 新年おしるこ会            |
| 4.29    | カブ10周年記念式          |
| 5.5     | 合同バスピクニック 三浦半島荒崎海岸 |
| 7.5     | 教会バザー              |
| 7.21-24 | 志賀高原発哺温泉ホテル        |
| 9.5     | 合同キャンプファイヤー, 上進式   |
| 10.25   | ピクニック ICC          |
| 10.31   | 教会バザー              |
| 12.19   | 合同クリスマス礼拝          |

### 昭和40年

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 5.5     | 合同バスピクニック 猿島     |
| 6.9     | 11周年記念祝会         |
| 7.21-24 | キャンプ 八ヶ丘美しの森     |
| 9.4     | 合同キャンプファイヤー, 上進式 |
| 11.13   | 教会バザー            |
| 12.18   | 合同クリスマス礼拝        |

### 昭和41年

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 4.2     | 万石隊長就任3代         |
| 4.29    | 合同バスピクニック 平林寺    |
| 6.18    | 12周年記念祝会         |
| 7.21-24 | キャンプ 伊東ユースホテル    |
| 8.18-20 | 合同リーダー研修会        |
| 9.3     | 合同キャンプファイヤー, 上進式 |
| 11.5    | 教会バザー            |
| 12.17   | 合同クリスマス礼拝        |
| 12.20   | カブクリスマス祝会        |



昭和42年

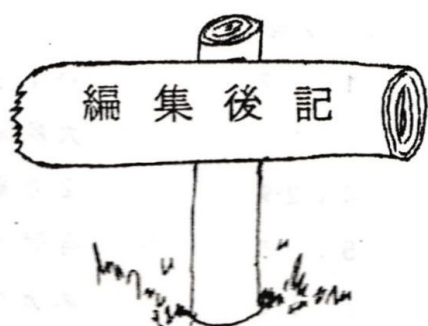
- |         |                  |
|---------|------------------|
| 1. 7    | おもちつき            |
| 4.      | 大島隊長就任4代         |
| 4.29    | 20周年記念式典         |
| 5. 3    | 合同バスピクニック        |
| 6.25    | スカウトバザー          |
| 7.21-24 | キャンプ 秩父          |
| 9. 2    | 合同キャンプファイヤー, 上進式 |
| 10. 7   | 共同募金             |
| 10.15   | カブ隊ピクニック         |
| 10.28   | 教会バザー            |
| 12.16   | スカウト合同クリスマス礼拝    |
| 12.21   | クリスマス祝会          |

昭和43年

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 1. 6    | おもちつき大会          |
| 2.18    | スカウトサンデー         |
| 5.15    | 14周年お誕生会         |
| 6.29    | バザー              |
| 7.20-24 | キャンプ 羽村          |
| 8.24-26 | 月の輪キャンプ 横浜杉田     |
| 9. 7    | 合同キャンプファイヤー, 上進式 |
| 10. 5   | 赤い羽根             |
| 10.26   | 教会バザー            |
| 11.23   | バスピクニック 日原鐘乳洞    |
| 12.14   | 合同クリスマス礼拝        |
| 12.20   | クリスマス祝会          |

昭和44年

- |      |                  |
|------|------------------|
| 1.11 | おもちつき, ブラウニーと新年会 |
| 2. 1 | ブラネタリウム見学        |
| 2.22 | 四団誕生日, 22周年      |
| 4.29 | 合同バスピクニック 長浜海岸   |
| 6.29 | 15周年記念式典, 祝会     |



ます。

○お忙しいところ原稿をお引き受け下さいました皆様に心から御礼を申し上げます。また、イヌのカットシリーズを描いて下さったローバーの鈴木さん、その他御協力いただきましたリダーの方々に感謝を申し上げます。

○これを機に先輩はもちろんのこと、他の団の方々も土曜の午後足をはこんで来て下さいますようお願い申し上げます。

○五年前に十周年記念誌「あしあと」を発行し、デンマザーとしてさよならをいった私が、くしくも十五周年記念誌を再び編集させていただくことになり、感無量です。新しい人と少しばかり長くいる者とのアイディアを出しあって三ヶ月。守銭奴のごときウルサイ原稿集めにお耳ざわりだったことと思ひ、ここにおわび申し上げます。(里見)

○あのカブ、このカブ、いろんなスカウトが通りすぎここに十五才のお誕生日をむかえることになりました。

○カビングのあり方が再検討され、より良いスカウティングへと、大きく飛躍したこの年に、四団が十五周年をむかえたことは、意味深いことだと思ひます。過去を土台にして大きく伸びて行こうと一同張切っています。

年少隊創立十五周年記念誌

発行日 一九六九年六月二十九日

編集者 里見明子、長谷川 泉

原 真知子、丸山和子

印刷人 グリーン印刷工芸社

千代田区三崎町一四一九

TEL 二九一九六三・三四九五

発行者 ボーイスカウト東京第四団

カブスカウト隊

東京都港区赤坂一―一三一六

霊南坂教会内